

豊平区の歴史

~THE HISTORY of TOYOHIRA WARD~

発刊に寄せて

豊平区が昭和 47（1972）年 4 月の区制施行により誕生してから半世紀が過ぎました。当初 15 万人だった人口は 20 年余りで倍増し、平成 8（1996）年に 30 万人を突破しました。この人口増加などにより、豊平区は分区し、平成 9（1997）年に清田区が誕生。豊平区の人口は約 20 万人となりましたが、その後も増加が続き、令和 6（2024）年には約 23 万人となり、発展を続けています。

都市化が進み、豊平区内では、かつて広がっていた田園風景を見ることは、ほとんどなくなりました。しかし、まちの風景を形作る道路や橋、公園、家並みなどが現在の姿になるまでには、それぞれ物語があります。その物語を知ると、普段見慣れた風景の中に、これまでの人々の営みの痕跡を見つけ、新たな魅力を発見することができるかもしれません。

この本を通じて豊平区の歩みを振り返り、区民の皆さんが豊平区の魅力を未来へつなぐ一助としていただけたら幸いです。

札幌市豊平区

もくじ

概略	5
行政	11
産業	25
道路・橋	45
交通機関	52
教育	59
旧陸軍	64
生活・出来事	68
各地域の歴史と今	78
年表	104

概 略

- 1 縄文文化～アイヌ文化期
- 2 江戸から明治へ
- 3 村の発展と合併、町への昇格
- 4 交通網の発展
- 5 農業の盛衰
- 6 札幌市との合併、豊平区の誕生
- 7 その後の発展、平成からの出来事

1 縄文文化～アイヌ文化期

札幌では、旧石器のものとみられる石器が見つっていますが人々が集落をつくって暮らしていた明らかな痕跡は、縄文早期に現れはじめます。豊平区内にも、縄文文化、続縄文文化などの遺跡が発見されており、この時代から人々が暮らしていたことがわかります。

発掘された遺跡は、平岸、美園、月寒中央、月寒西、月寒東、西岡、福住、羊ヶ丘など、区内の広い範囲にわたっており、生活に使用していた土器だけでなく、集落跡や墳墓も発見されています。主な縄文遺跡としては、あやめ野中学校周辺（月寒東3条11丁目、月寒東5条13丁目）で発見された竪穴住居跡や土坑など（T151遺跡）があります。一部は「あやめ野中学校校地内遺跡の森」として現状保存されています。その他、羊ヶ丘（T464、465、466、467、468、469、470遺跡）や天神山緑地周辺（T71遺跡）、平岸ぼうず山公園周辺（T310遺跡）でも縄文中期の竪穴住居跡などが発掘されています。また、西岡（T210遺跡）では縄文晩期末から続縄文初頭のお墓と推定されるものが発掘されています。

T71遺跡やT151遺跡、T469遺跡などでは擦文文化、天神山緑地の天神山チャン跡ではアイヌ文化期のチャン跡が発見されています。擦文文化以降も、人々の営みが続いていたことがわかります。

本州の時代区分	年代	北海道の時代区分	
旧石器文化	20000年前 16000～	旧石器文化	
縄文文化	草創期	15000年前 10000年前	縄文文化
	早期	7000年前	
	前期	5500年前	
	中期	4500年前	
	後期	3000年前	
	晩期	2300年前	
弥生文化		続縄文文化	
古墳文化			
飛鳥時代	1300年前		オホーツク文化期
奈良時代			
平安時代			
鎌倉時代	800年前	擦文文化	
室町時代			
安土・桃山時代			
江戸時代		アイヌ文化期	

北海道の時代区分は、考古学における一般的な時代区分を示しています。

図-1 時代区分

2 江戸から明治へ

安政4（1857）年に行われたぜにばこ（現在の小樽市銭函）から千歳・勇ゆう弘ふつに至る札幌越新道の開削に伴い、現在の豊平3条1丁目付近で、通行屋（旅行者の休憩・宿泊施設）の建設が始まりました。安政6（1859）年には、志村鉄一しむらてついちがこの地に定住し、通行屋の番人も務めました。

明治時代に入り、北海道開拓使が設置されると、本州から多くの移住者がやってきました。明治4（1871）年には、現在の岩手県出身の人々が平岸、月寒などに移住して開拓が始まりました。その後、明治5（1872）年には平岸村と月寒村が、そして、明治7（1874）年には豊平村が誕生。また、明治8（1875）年には、開拓使のお雇い外国人技師ホルトやとの設計による最初の本格的な豊平橋が完成しています。



写真-1 最初の本格的な豊平橋
(アメリカ人技師ホルト設計、明治8年完成)

3 村の発展と合併、町への昇格

これら3つの村は、それぞれが違った形で発展していきました。平岸村は、豊平川上流域までを含み、後に「平岸リンゴ」として有名になるリンゴの栽培などで栄えていきました。また、月寒村は、当初、現在の北広島市方面までを範囲としており、農業を中心とした街でしたが、明治29（1896）年に陸軍第7師団しだんの兵営が設置され、後に歩兵第25連隊れんたいとして長くこの地に置かれたことにより、軍都としての性格を併せ持つことになりました。そして、豊平村は、室蘭街道（現在の国道36号）から当時の札幌区に入る玄関口として、商店や宿などが立ち並び、にぎわいを見せました。明治35（1902）年、豊平・月寒・平岸の3村が合併して、新た

に豊平村となりました。そして、明治 41（1908）年には、豊平町に昇格。さらに、同 43（1910）年、現在の豊平地区が札幌区に編入し、町役場が豊平から月寒に移転したことにより、月寒は行政の中心地として栄えました。

4 交通網の発展

大正時代に入ると、豊平町にもいくつかの交通機関が登場してきました。

大正初期には、月寒から札幌の中心部まで客馬車きやくばしやが走りました。大正 7（1918）年には、豊平、平岸を通過して定山溪に至る定山溪鉄道が開通。さらに、大正 13（1924）年には、路面電車が豊平川を越えて、豊平地区まで延びました。また、同じころ、月寒まで乗合バスのりあいも営業を始めました。

年号が変わって間もなく、昭和 2（1927）年には、札幌市が路面電車を買収し、市電となります。バスや電車が行き交い、定山溪鉄道も交差していた室蘭街道（現在の国道 36 号）は、商店が立ち並び、まさに交通の要衝ようしゆうと呼ぶにふさわしいにぎわいを見せていました。

5 農業の盛衰せいすい

明治時代から始まった平岸地区のリンゴ栽培。この「平岸リンゴ」の名は、全国的に有名になったばかりでなく、明治中期から後期にかけては旧ソ連のウラジオストクに、また、昭和 11（1936）年には試験的ながらシンガポールに輸出されるほどに栄えました。しかし、このリンゴ栽培は、宅地

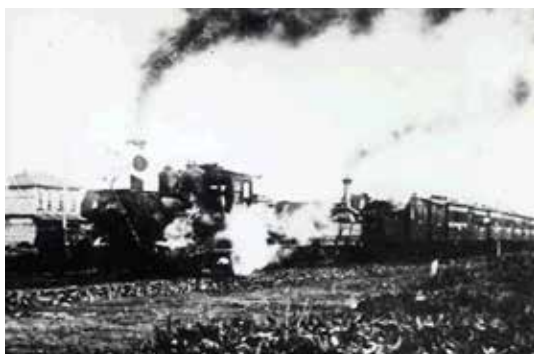


写真-2 豊平駅構内の定山溪鉄道（大正 7 年）

化の波にのまれ、次第に衰退していくことになります。

この他にも、ジャガイモやホップなど、各地でさまざまな作物が栽培されましたが、やはり、リンゴと同じような運命をたどっていきました。

6 札幌市との合併、豊平区の誕生

徐々に都市化が進行していった昭和 36（1961）年、豊平町は、郷土のさらなる発展のため、札幌市と合併しました。人口は増加の一途をたどり、交通体系に変化の兆しきざしが現れます。

自家用車の普及などの影響で、昭和 44（1969）年には定山溪鉄道が、また同 46（1971）年には市電豊平線が、それぞれ廃止され、代わって、同年、地下鉄南北線が開通しました。

さらにその翌年の 2 月、冬季オリンピック大会が開催され、同年 4 月には札幌市が政令指定都市となり、区制の施行に伴って、豊平区が誕生しました。

昭和 49（1974）年には、現在の豊平区役所庁舎が完成。環状通の区役所付近から国道 36 号にかけての中央分離帯にはリンゴの木が植樹され、並木として整備されました。



写真-3 リンゴ並木（昭和 50 年）

7 その後の発展、平成からの出来事

平成に入り、札幌ドームやカーリング場、平岸庭球場など各競技で世界大会が開催できるスポーツ施設が次々に建てられました。多くのスポーツ施設が集まる豊平区は、大きな大会の会場になることも多く、開催に当たっては、いつも地域の協力がありました。



写真-4 札幌ドームオープンセレモニー

会場になった地域の歩道の清掃や沿道の花壇の手入れ、大会当日の準備作業に協力するなどして大会を支えました。

また、各種スポーツ施設を活用して子ども向け体験会を開催するなど、さまざまな競技に触れる機会もつくってきました。

区が誕生して50年を迎えた令和4(2022)年から、「スポーツ」と「健康」を新たなキーワードに、ウォーキングをはじめとする身近な健康づくりに取り組んでいます。各種スポーツイベントの開催はもちろん、区内各所を巡るウォーキングマップを活用して、ウォーキングコースに関連したクイズを出題し、区内を歩いてもらう「てくてくとよひら」を実施しました。

また、翌年には「スポーツ」「健康」に「安全安心」をキーワードに加え、地域と協力して、交通安全や防災に関するさまざまな活動に取り組んでいます。

豊平区ウォーキングマップ(左)
区内10カ所のおすすめウォーキングコースを見どころとともに紹介。
指定のコースを巡り、クイズに答える
「てくてくとよひら(右)」も開催されました。



行政

- 1 月寒、平岸、豊平村の誕生
- 2 戸長役場制度の発足
- 3 町制施行により豊平町へ
- 4 豊平町の一部が札幌区へ編入
- 5 昭和初期の豊平町の行政
- 6 戦後の豊平町の行政
- 7 札幌市と豊平町の合併
- 8 区制施行により豊平区が誕生
- 9 清田区の分区
- 10 新しい豊平区

1 月寒、平岸、豊平村の誕生

明治2（1869）年、明治政府は北海道に開拓使を置き、本府建設の候補地探しと豊平の開墾^{かいこん}を行い、やがて、札幌に本府が置かれました。

明治4（1871）年以降、募集した開拓移民が月寒、平岸、白石、手稲などに次々と移住してきました。月寒村に盛岡（岩手）県農民44戸、185人（『開拓使事業報告書』では、43戸、185人となっている）が、そして、平岸村に胆沢（岩手）県農民や仙台藩士など65戸（62戸の説もある）、203人が移住しています。

やがて、移民による村落が形づくられ、村役人が置かれるようになりました。名主、組頭、百姓代の村三役制度が村々に広がっていきます。明治5（1872）年4月に戸籍が作られるようになり、これらの仕事と村をまとめるため、開拓使は戸長、副戸長を任命しました。この年、月寒村、平岸村が誕生しました。

一方、豊平村の誕生は、開拓使の「移民履歴調^{りれきしらべ}」によれば、明治6（1873）年、ときの松本十郎大判官により豊平に村落を築くことが計画され、土地の払い下げを戸長などに願い出るよう勧め^{すす}めています。

やがて、土地の払い下げを受けた石川県からの農民10数軒が移住し、この集落は加賀開墾地と呼ばれるようになりました。明治7（1874）年、開拓使布令によって豊平村は、「豊平橋ヨリ月寒村下迄新道筋（現在の国道36号）左右」の地域に設定すると、正式に全国に告示され、豊平村が誕生しました。

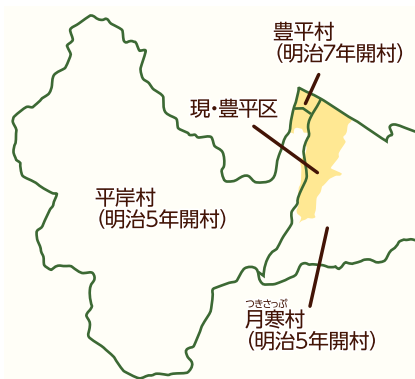


図-1 月寒村・平岸村・豊平村

2 戸長役場制度の発足

①上白石村に戸長役場を置く

明治9（1876）年、北海道は大区と小区に分けた大小区制が敷かれ、札幌郡は第一大区と呼ばれていました。豊平、月寒、平岸、白石、上白石の5村は第五小区と呼ばれ、一つの小さな区にまとめられました。そして、小区ごとに戸長が置かれ村々を治めていました。

やがて、明治12（1879）年には、郡区町村制が敷かれるようになりました。郡には郡長、その下には新しい組織による戸長役場が置かれましたが、まだ役場の事務所はありませんでした。この戸長役場制度は、2級町村制が敷かれるまで存続しました。この年、豊平村も含まれた札幌郡全部が札幌区となり、札幌区役所ができました。翌13（1880）年、豊平村、月寒村、平岸村、白石村、上白石村の5村を管轄する戸長役場（初代戸長・片倉景範^{かたくらかげのり}が任命）が、上白石村に置かれました。

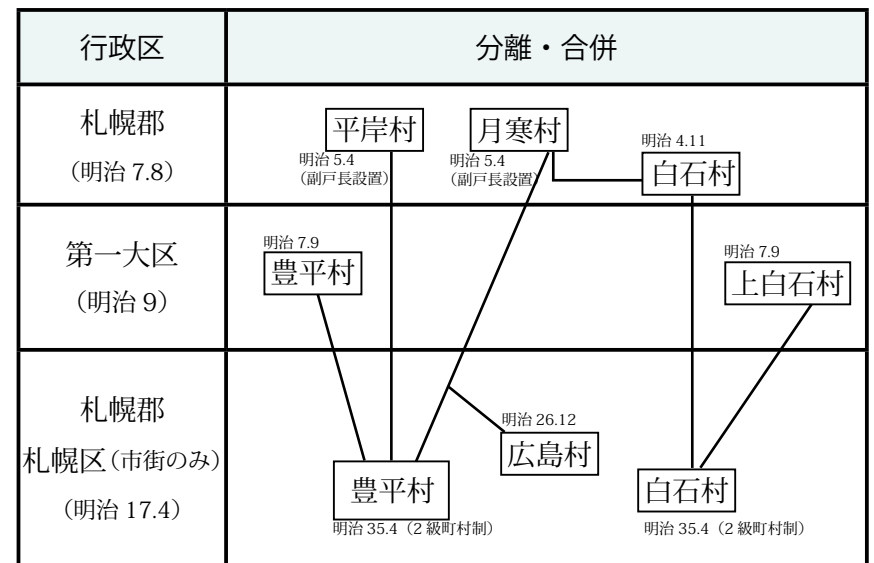


図-2 諸村の変遷図

②豊平村に戸長役場が移転

明治 15（1882）年には北海道開拓使が廃止され、北海道は札幌、函館、根室の 3 県に分割されました。同 17（1884）年、札幌の中心は札幌区役所によって治められ、札幌周辺の村々をまとめる郡区役所ができ、豊平村も郡区役所の管轄に入ることになりました。

明治 18（1885）年、上白石村にあった戸長役場は豊平村に移ったので、豊平村は、月寒村、平岸村、白石村、上白石村の村々の行政の中心となります。翌 19（1886）年、札幌、函館、根室 3 県が廃止になり、北海道庁が設置されました。その後、明治 26（1893）年、月寒村のうち大曲以東が分離し、広島村（現在の北広島市）が新設されました。同 30（1897）年には上記 5 村のうち白石村、上白石村の 2 村が分離独立し、残った月寒村、平岸村、豊平村の 3 村は、豊平戸長役場の管轄に置かれることになりました。

明治 35（1902）年 4 月、2 級町村制が敷かれ、豊平村、月寒村、平岸村の 3 村が合併し、新しい豊平村が誕生しました。当時の人口は 8 千余人で、役場の職員は村長を含めてわずか 6 人でした。村役場の仕事は、予算や戸籍、教育、衛生の他、兵事や社寺宗教などの事務を行っていました。この年の 7 月、第 1 回村会議員選挙が行われ、12 人の議員が初当選しました。それまでは、名誉職の村総代人が村の代表として政治に参加していました。ここに、後の豊平町の基礎が形づくられることとなります。



図-3 3村の合併

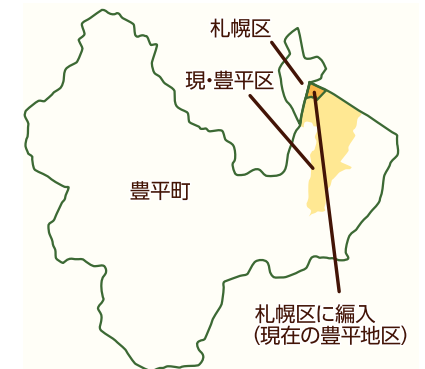
3 町制施行により豊平町へ

明治 40（1907）年 4 月、豊平村は琴似村、札幌村などの村々よりも早く、1 級町村となりました。当時、道庁は地方費の削減と行政整理の目的で、

2 級町村から 1 級町村への昇格を推進していました。1 級町村となるためには、戸数が 1 千戸以上、人口が 5 千人以上、公民権のある者 150 人以上という条件がありました。これらの条件にもかかわらず、早い時期に豊平に町制が敷かれたのは、村内に争いごとがなく、良くまとまっていたことがあったようです。そして、その翌年の 41（1908）年 6 月に町制が施行され、豊平村は豊平町となりました。

4 豊平町の一部が札幌区へ編入

一方、明治 43（1910）年 4 月、行政区の変更のため豊平町大字豊平村の一部（現在の豊平地区）が札幌区に編入されることになりました。このため、豊平村豊平 18 番地（現在の豊平 4 条 6 丁目）にあった豊平町役場を大字月寒村 32 番地（現在の月寒西 1 条 6 丁目）に移転することになりました。



その後、大正 9（1920）年 11 月、豊平町の一部が札幌区に編入に役場庁舎を大きくし、開町 50 周年記念式典を開催しました。大正 10（1921）年には札幌支庁は石狩支庁に改称され、豊平町もその管轄に入ることになります。

図-4 豊平町の一部が札幌区に編入

5 昭和初期の豊平町の行政

昭和 3（1928）年 5 月、新しい選挙制度のもと、初めて行われた豊平町会議員選挙の有権者数は 1,950 人で、前回（大正 13 年）の 386 人に比べて、およそ 5 倍になりました。また、議員定数も前回の 20 人から 24 人に増えました。昭和 9（1934）年には町役場庁舎が新築され、工事費（役場営繕費）は、およそ 1 万 3 千円（町の総予算 16 万円）に上りま

した。役場の職員数は、松崎亀二町長^{まつぎかめじ}を含めて15人で、ほかに34人の区長（現在の区長とは異なる）がいました。

道庁は、行政整理の一環として、市町村に字名変更^{あざ}の指導を行っていました。その結果、昭和19（1944）年12月に豊平町大字豊平村、月寒村、平岸村の大字が廃止され、新たに24の地名に改称されることになりました。この時から「つきさっぷ」は「つきさむ」と呼ばれるようになりました。

6 戦後の豊平町の行政

終戦後の昭和22（1947）年、豊平町役場は、清田、平岸、中の島、真駒内、石山、藤野、簾舞^{みすまい}、定山溪地区に8カ所（昭和25年に平岸、石山、定山溪の3カ所に縮小）の出張所を設けました。この当時の豊平町は、現在の豊平区の区域（豊平地区を除く）の他に、南区、清田区の区域を含んでいました。

同年、初の公選選挙が行われ、第5代の大久保清太郎町長^{おおくぼ}が選ばれました。昭和23（1948）年3月、豊平町自治体警察が発足。しばらくは、北海道警察との二重構造で運営されていましたが、その後、北海道警察に統合されることになりました。また、同年4月、豊平町消防本部と豊平町消防団が発足しています。翌24（1949）年、町の総予算は、はじめて1億円を突破（1億2千万円）しました。このときの町の人口は、29,047人でした。昭和31（1956）年2月、豊平町役場は月寒村32番地（現在の月寒西1条6丁目）から月寒536番地（現在の月寒中央通7丁目）に移転しました。

7 札幌市と豊平町の合併

①合併に向けた動き

昭和32（1957）年6月22日、札幌市と豊平町の早期合併を公約に掲げた本間義孝氏^{ほんま よしたか}が、第8代豊平町長に就任しました。札幌市と豊平町と

の合併の話は、すでに、前町長のころから持ち上がっており、実に10年来の課題でした。

本間町長は就任後、何度も札幌市との交渉を重ね、また、町民大会を開くなど合併に向けて準備を進めていました。そして、翌33（1958）年3月12日に開会された第1回定例町議会では、合併調査特別委員会の中間報告がなされ、「昭和34年3月の合併が適当と認める」と、全会一致で承認されました。

②豊平町を市に昇格させようとする動き

しかし、それから1カ月後の4月22日から23日にかけて開かれた第3回臨時町議会で、合併に反対する議員から「豊平町を市とすることの申請について」という案が出されました。その趣旨は、豊平町が市になったら、札幌市と対等の立場になって、今よりも有利に合併交渉が進められるというものでした。これは表向きの理由で、実際は合併引き延ばしを図ったものと考えられます。

審議の結果、賛成13、反対12と1票の小差で可決され、議場は騒然となりました。ただちに町長は、議会の決定に反対する意思を表明しました。翌24日付の北海道新聞の見出しは、「町議会の解散も。豊平町の“市昇格”問題化 本間町長、議決執行の意思なし」と報じています。

③町政が混乱、町長、議員辞任騒動

そして、同じく昭和33（1958）年の12月23日、第4回定例町議会に、町長から札幌市との合併案が提出されました。それは、10年余りにわたる合併問題の論議^{ろんぎ}を経て、初めて町長側から提案されるものでした。しかし、この案は賛成12、反対16で否決されました。そのため、町長と合併に賛成した議員は、議長に辞職願いを提出しましたが、元町長や町民代表らの説得に応じて辞職願いを撤回^{てつがい}。2週間以上続いた町政の空白状態は正常に戻りました。

やがて、昭和34（1959）年1月の後半、各地区の町内会婦人部によ

る合併実現にむけた大集会が開かれ、また議会に請願書が次々と提出されました。しかし、2月14日の第4回臨時町議会での採択の結果は、賛成12、反対14で、再度、札幌市との合併案は否決されました。

④合併に向けて大詰めを迎える

ところが、昭和34(1959)年4月に行われた町議会議員の改選選挙では、合併促進派20人、慎重派10人が当選。一転して合併促進派が議席の3分の2を占め、合併に向けて大きな弾みがつきました。6月には合併の時期、方法などについての調査、研究を目的とした「豊平町札幌市合併特別委員会」が町議会に設置され、昭和36(1961)年4月まで、実に35回もの審議が重ねられました。

また、昭和35(1960)年12月、札幌市議会においても合併調査特別委員会が設けられ、豊平町と札幌市との合同会議が持たれるなど、両者の交渉も大詰めを迎えることになりました。



写真-1 月寒会館前に詰めかけた人々
(昭和36年3月10日)

⑤札幌市と豊平町がついに合併

昭和36(1961)年3月10日、第1回定例町議会、本会議初日の午前7時。議場となる月寒会館前は、反対派の町民約300～400人が集合しピケ(英語のpicket:見張り、監視員の意味)を張り、町長、議長、議員の入場を阻止するという異常事態が起きました。町長はやむなく警察の出動を要請し、ピケを排除。その日の午後4時40分、ようやく本会議の開会が宣言されました。

そして、3月14日、満員に膨れ上がった傍聴席と賛成派、反対派、双方の町民約500人が議場の外で見守る中、記名投票が行われ、午後4時20分、賛成18、反対10の賛成多数で、「豊平町を廃し、札幌市に編

コラム：豊平町役場庁舎の移りかわり

(現在の月寒西1条6丁目、月寒児童会館付近)



写真-2 明治43年に新築されたもの



写真-3 大正9年に改築されたもの



写真-4 昭和9年に新築されたもの

入する議案」が可決されました。一方、同日の午後5時25分札幌市議会でも全員賛成で議決され、町を二分した合併問題は、長い道のりを経てようやく決着を見ました。

5月1日、午前9時30分。札幌市役所において原田興作市長と本間町長が事務引継ぎの署名を行い、合併の手続きを終えました。ここに、豊平町は札幌市に編入され合併が成立するとともに、明治7年の開村以来87年間にわたった豊平町の歴史は幕を閉じたのです。町役場は、札幌市役所月寒支所と改称され、豊平、美園、平岸、中の島、真駒内、石山、定山溪地区に出張所が置かれました。



写真-5 公文書に署名を交わす、当時の原田札幌市長(右)と本間豊平町長(左)



写真-6 事務引継書

8 区制施行により豊平区が誕生

昭和47(1972)年2月、アジアで初めての冬季オリンピック大会が札幌で開催されました。そして、この年の4月、札幌市は福岡市、川崎市とともに政令指定都市の仲間入りを果たしました。同時に区制が敷かれ、豊平区を含む7区が誕生し、それぞれの区に区



写真-7 区役所開設記念祝賀会の様子

役所が置かれ、各区の特色を生かした、きめ細やかな行政が行われるようになりました。

豊平区役所仮庁舎は、月寒中央通7丁目(現在のつきさっぷ中央公園付近)にあった旧札幌市役所月寒支所に開設されました。



写真-8 建設中の区役所新庁舎(昭和48年)

区の行政組織は、区長、区次長の下に総務部、税務部、土木部、福祉事務所の4部(現在の機構と異なる)が置かれ、区政がスタートしました。発足当初の区内の人口は151,101人、世帯数は48,447世帯でした。

さらに、昭和49(1974)年2月、豊平区役所が現在の平岸6条10丁目に移転、新庁舎が落成し、本格的に業務が開始されました。

昭和52(1977)年7月には区制5周年を記念して、豊平区のシンボルマークが決まりました。これは、区民に作品を募集し、100点余りの応募作品から投票などで選ばれたものです。

平成4(1992)年8月には、花とふれあいの街を目指す「とよひらはなランド」事業の取り組みの一つとして、ペチュニアが豊平区の花に制定されました。毎年5月になると、歩道の植樹升などに植えられ、街に彩りを加えています。



図-5 シンボルマーク。豊平区の「と」と「リンゴ」を表している



写真-9 ペチュニア。ナス科ペチュニア属の一年草。別名ツクバネアサガオ

9 清田区の分区

区制が施行された後も、豊平区は順調に発展を遂げ、平成8（1996）年8月、区内の人口がついに30万人を突破。全国の政令指定都市の区の中で、最も人口の多い区に成長しました。このような著しい人口増加などにより、平成9（1997）年11月4日、豊平区から月寒東の一部と、北野、清田、有明以東の地区が分かれ、新たに清田区が誕生しました。分区によって、豊平区の面積は46.35km²（清田区は59.70km²）、人口は199,805人、世帯数は92,530世帯となりました。

10 新しい豊平区

平成に入っても、発展を続ける豊平区。平成6（1994）年に地下鉄東豊線が福住まで延長され、平成13（2001）年には、札幌ドームが羊ヶ丘に完成。翌年には、サッカーの世界カップ大会が開催され、会場はサッカーファンの熱気に包まれました。その後、平成15（2003）年には「北海道日本ハムファイターズ」の本拠地球場となることが決まり、北広島市に移転した令和5（2023）年まで、多くの野球ファンが訪れました。また、FISノルディックスキー世界選手権札幌大会や冬季アジア札幌大会、ラグ



写真-10 札幌ドーム



写真-11 カーリング場
（どうぎんカーリングスタジアム）

ビーの世界カップ大会が開催された他、各種のスポーツ・文化イベントが開催され、北海道のメイン・ドームとして定着しています。

この他、区内には平成24（2012）年に通年型のカーリング場、平成30（2018）年に世界規模の大会が開催できる平岸庭球場がオープンしました。平成12（2000）年に開設された北海道立総合体育センターを含め、大規模なスポーツ施設が多い区となりました。

平成30（2018）年に、北海道胆振東部地震が発生。豊平区は震度5弱を観測し、北海道全域で停電が発生したため、区民の生活に混乱が生じました。また、区内の一部地域では液状化現象による住宅への被害も見られました。

令和2（2020）年に、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、感染拡大を防止するため、イベントや地域活動などが軒並み中止となり、区民生活に影響を及ぼしました。このコロナ禍は3年余り続き、令和5（2023）年には感染症の影響が減少したため、イベントや地域活動などがコロナ禍前の状態に戻りました。

豊平区のキャラクター「こりん」と「めーたん」が誕生したのは、平成16（2004）年。豊平区のイメージを表すものとして「りんご」と「ひつじ」をモチーフに、「豊平区の魅力を発見する探偵」として誕生しました。「こりん」と「めーたん」という愛称は区民から

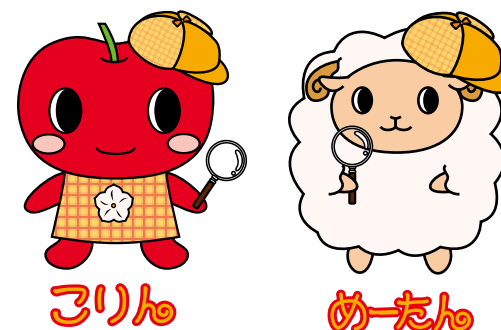


図-6 豊平区キャラクター
「こりん」と「めーたん」

募集し決められたものです。「こりん」と「めーたん」は誕生後、区のさまざまなイベントや冊子などに登場し、広く区民に愛されるキャラクターに成長しています。

区制50周年となった令和4（2022）年4月には、人口は225,836人、世帯数は120,653世帯となり、分区後の約25年間で人口は1.13倍、世帯数は1.3倍増加しています。

コラム：「こりん」と「めーたん」

「こりん」と「めーたん」は、豊平区への愛着をさらに深めてもらおうと誕生した豊平区のキャラクターです。誕生までには、区内在住の小学生など、たくさんの区民の皆さんの協力がありました。

平成 15（2003）年に、区内の小学校を対象に豊平区のキャラクターイメージを募集。その後、これらのキャラクターイメージをさらに具体化するため、区役所近隣小学校（東山小学校、美園小学校、南月寒小学校）に通う児童と札幌市高等専門学校（現在の札幌市立大学）の学生によって構成された「豊平区イメージキャラクター制作委員会」で検討が重ねられ、「豊平区の魅力を発見する探偵」で「りんご」と「ひつじ」をモチーフにしたキャラクター像が出来上がりました。平成 16（2004）年 1 月に広報さっぽろなどでキャラクターを発表。併せて愛称を募集し 1,003 点の応募がありました。同年 3 月、「豊平区キャラクター愛称選考委員会」が開かれ、その選考の結果、愛称は「こりん」と「めーたん」に決まり、4 月 7 日には、区民センターで愛称発表セレモニーが行われました。

誕生から 20 年、区の魅力を発見して伝えるキャラクターとして、区民に親しまれています。



写真-12 リンゴ並木のリンゴを円山動物園へ贈呈するこりとめーたん（令和 5 年）

産 業

- 1 農業（リンゴ）
- 2 農業（その他の農作物）
- 3 畜産業
- 4 林業
- 5 水産業
- 6 鉱業
- 7 商業
- 8 工業

1 農業（リンゴ）

①リンゴ栽培の始まり

明治2（1869）年、開拓使の顧問ケプロンは、「リンゴは温帯のみならず、北海道のような寒地でも良く育つ」と、開拓使に果樹栽培を勧めました。これを受けて、開拓使は、明治5（1872）年、アメリカから、リンゴ、ナシ、ブドウなどの果樹の苗木を輸入しました。同7（1874）年には、その苗木をもとに、開拓使本庁舎内に果樹園（札幌官園）が設けられました。これが札幌における果樹栽培の始まりです。

②栽培の中心であった平岸のリンゴ

区内でリンゴの栽培が一番盛んだったのは、平岸です。札幌官園で育てられた苗木が明治8（1875）年に道内各地に配られ、平岸には425本のリンゴの苗木が配られました。明治17（1884）年ごろには、本格的なリンゴ栽培が始まり、多くのリンゴ園が誕生しました。明治30年代までは、平岸をはじめとする北海道のリンゴ生産量は、青森県を上回っていました（現在は青森県が最も多い）。しかし、リンゴ園の面積が増えたり、木が古くなったりすると、病気や害虫などが発生するようになりました。このため、中には、果樹を伐採し、廃園に追い込まれたところもあったようです。

③品質の改善に挑む

大正時代になると、天候不良によって不作となる年が多かったため、平岸では、道からの技術指導を受けたり、組合を組織したりするなど栽培方法の研究や講習を行い、品質の改善に努めました。昭和10（1935）年には、一念発起した青年10人が、リンゴ栽培の先進地青森県弘前市の果樹園で、1年間、栽培方法を学びました。

そうして、青年たちは新しい技術を身に付け、平岸のリンゴの質を向上させることに成功したのです。

④世界に進出した平岸リンゴ

昭和11（1936）年ごろになると、平岸のリンゴはシンガポールにまで輸出されるようになり、「平岸リンゴ」や「札幌リンゴ」の名で親しまれました。また、同じころ、収穫後長い間保存ができるレンガの倉庫が作られました。こうして、リンゴが出回らなくなる時期にも、平岸のリンゴは出荷できるようになりました。



写真-1 平岸にあったリンゴ園（昭和10年ごろ）

⑤リンゴ栽培の衰退

病気や害虫、天候不良など、多くの困難を乗り越えてきたリンゴ栽培も、都市化の波には勝つことができませんでした。宅地化の進行や道路整備、昭和46（1971）年の地下鉄の開通などにより、リンゴ園は次々と姿を消していったのです。

⑥リンゴの歴史を後世に



写真-2 第1回リンゴまつり（昭和51年）

現在は、昔のリンゴ園の名残として、リンゴ倉庫が区内にいくつか残っています。また、リンゴの栽培の中心地であった平岸の天神山緑地には、昭和41（1966）年10月、消えていったリンゴの歴史を後世に伝えようと、石川啄木の歌が刻まれた「平岸林檎園記念歌碑」が建てられました。また、昭和49（1974）年11月には、「街

路樹に実の成る木を植えて、街並みに彩りを添えよう」との当時の板垣武^{いたがきたけ}四市長の提案により、美園地区の環状通中央分離帯にリンゴ並木が完成しました。この並木沿いには、「りんご並木の碑」も建てられています。

そして、昭和 51（1976）年には、リンゴの栽培を通じて^{つちか} 培われた不屈^ふの精神をたたえ、ふるさとを大切に^{つちか}する心を未来に伝えようと、「豊平区民のつどい第 1 回リンゴまつり」が盛大に行われました。この祭りは、平成 11（1999）年まで 24 回にわたって続けられました。

2 農業（その他の農作物）

農地が広がっていた豊平町では、各地で、米のほか、ジャガイモ、麦類、豆類、トウモロコシ、ソバ、ホップ、ビートなどの野菜、ナシやイチゴといった果実など、多くの種類の作物が栽培されました。

度重なる風水害や病虫害に耐えて^{すいたい} 発展し、都市化の波にのまれ衰退していった豊平の農業。ここでは、その中から、ジャガイモとホップに焦点を当て、移り変わりをたどります。

①ジャガイモ

食用のジャガイモは、明治時代から栽培されており、現在の西岡や福住、月寒などに広がっていた畑で生産されたイモは、海外に輸出されるほどになりました。

大正末期に、関西の会社から豊平町農会に、種イモとして、「メイクイン」の注文がありました。しかし、当時はそれがどのような品種かということがわからず、一度は断った後、再度の要請に、その時栽培していたロシアイモを送りました。すると、翌年、同じ会社から、「今年は本物のメイクインを送ってほしい」という依頼があり、たまたまその年から西岡地区で栽培が始まったメイクインを送ることができたのです。これを機に、種イモの出荷が軌道に乗り、高価格のメイクインの生産量は増加し、「豊平薯」として有名になりました。

戦時中にはジャガイモの出荷が制限され、終戦時には、ほとんどの品種が生産されなくなっていました。戦争が終わると、「豊平薯」を復活させたいという声が高まり、昭和 22（1947）年には、栽培技術の向上を目的として、「豊平馬鈴薯採種組合」が結成されました。この組合では、病虫害の克服などに取り組み、再び種イモの栽培が盛んになりました。



写真-3 種バレイシヨの出荷風景（年代不明）

しかし、その後、急速な都市化の進行に伴って、住宅街でジャガイモ栽培を続けていくことは、徐々に難しくなっていました。区内の種イモの生産は平成 9（1997）年を最後に中止され、現在では、わずかに食用のジャガイモ栽培が行われているだけになっています。

②ホップ

ビールの原料となるホップは、明治時代に平岸や西岡などで栽培が始まりました。当時のビール会社は、当初、札幌の山鼻に直営のホップ園を設けてホップの栽培を始めましたが、それだけでは間に合わなくなったために、昭和初期には札幌近郊の農家と次々と契約を結び、平岸や西岡でも契約農家が増加しました。

戦後、ホップの生産量は急速に減少しましたが、昭和 36（1961）年には、当時の日本麦酒株式会社（現在のサッポロビール株式会社）直営の西岡ホップ園が設置



写真-4 平岸にあったホップ園（昭和 36 年ころ）

され、昭和 48（1973）年まで栽培が続けられました。

また、平岸付近でも昭和 40 年代半ばまで、ホップ園が開設されており、丈が高く、つぼみ状の花を付ける独自の外観のホップを見ることができました。

3 畜産業

①牛

開墾当初は、土地も肥沃で作物が豊かに育っていました。しかし、毎年十分な肥料をやらなかったため、明治の終わりごろになると土地がすっかりやせてしまいました。そこで、堆肥を確保する目的からも、各農家に牛や馬などの飼育が広がりました。



写真-5 黒澤牧場（昭和 36 年ごろ）

月寒で初めて乳牛を飼ったのは、阿部牧場です。創立は明治 20（1887）年ごろで、当時豊平川河畔に住んでいた阿部与之助氏が、現在の北海道大学や真駒内種畜場から牛を譲り受けて飼育を始めました。また明治 40（1907）年ごろから、二里塚（現在の東月寒）では、嵯峨牧場が乳牛を飼育していました。

明治 39（1906）年には、二里塚に農商務省月寒種牛牧場（所在地は現在の北海道農業研究センター）が設置され、事務所、畜舎の建設に多くの人が集まってきました。ここで働く人たちの勧めや、畜牛に熱心な人が多かったこともあり、大正から昭和にかけて、吉田、富森、高島、木村、高倉、黒澤、奥野などたくさんの牧場が開かれました。

②馬

馬は、畑を耕したり、馬車や馬そりを引いて重いものを運んだり、いろいろな場面で重宝されました。また、農家で飼っていた農耕馬は、定山溪方面の山で伐採された木材の運搬にも使われていました。戦時中は、農耕馬も軍の要請によって、戦地に送り出されることもありました。しかし、戦争が終わると、徐々に農耕が機械化され、馬を飼育する農家が少なくなっていました。

③養豚

豊平町で、養豚が盛んになるのは、大正末期から昭和の初めにかけてです。豚の飼育を、農業の副業としてばかりではなく、専業とする人も多かったです。それは、畜産試験場北海道支場（後の北海道農業研究センター）や、真駒内種畜場が近くにあり、ここから貸し付けられた豚を飼育したり、技術的指導を受けたりすることができたためです。



写真-6 月寒にあった養豚場（昭和 4 年ごろ）

飼育はそれほど手がかからず、飼料はジャガイモのくずや、しょうゆかす、でん粉かすなどが主でした。また、軍隊から出る残飯も利用されたそうです。ふんは肥料となり、畑の生産力を高める役割を果たしました。

④養鶏

養鶏は、明治 10（1877）年ごろから手がける農家が多くなってきていわれています。中の島では、大正の末ごろから、300～500羽の鶏を飼っている人たちがいました。その後、昭和 12（1937）年に北見から移住してきた志賀滝太郎氏が、1,000羽余りの鶏とともに、当時中の島にあった

養鶏場の後を継ぎました。その後も、数百羽の鶏を引き連れて、由仁や長沼から移住し、養鶏場を経営する人たちが現れ、採れた卵は、主に札幌の小売店などに卸おろしていました。現在の中の島1条3丁目から豊平川にかけては、卵を買いに来る人たちや、鳥料理を食べに来る人たちでにぎわっていたため、「とり屋町」と呼ばれていたそうです。

しかし、戦時中は、えさの不足や病気の流行により、たくさんの鶏が死んでしまいました。そのため、鶏を飼うことが難しくなり、中の島から次々と養鶏場がなくなっていきました。

⑤綿羊

明治40（1907）年ごろから、月寒種畜牧場では、綿羊の飼育が行われていました。

終戦後は、衣料を手に入れるのが難しい時代があり、そのころから、綿羊を飼育する農家が増えてきました。昭和20（1945）年には、北海道農業試験場（現在の北海道農業研究センター）から各農家に3頭貸し付けられ、1年間飼育するとそのうち1頭がもらえました。それからほとんどの農家で1～6頭の綿羊を飼育するようになり、刈り取った毛は各農家で毛糸にして、衣服を作っていました。

⑥八紘学園

学校法人八紘学園北海道農業専門学校（月寒東2条14丁目）は、国内外の農業の発展のために働く青年を育てることを目的に、昭和2（1927）年に設立されました。戦後は、何度か名称を変えて、昭和51（1976）年に現在の名称になりました。教育課程は



写真-7 八紘学園の牛舎（昭和52年）

2年制で、1年次に農業全般の基礎知識と農具・農業機械操作などを身に付け、2年次になると、畜産・園芸の2コースに分かれ、それぞれ専門知識と応用技術を深めています。

また、学園の中には有名な花ショウブ園がありまし



写真-8 一面に咲き誇る花ショウブ（平成16年）

た。これは、昭和30年代に八紘学園の創始者、栗林元二郎くりばやしもとじろう氏が、東京より数株の花ショウブを持ち帰ったことから始まり、2ヘクタールの敷地に約450品種10万株を栽培する、日本でも有数の花ショウブ園として知られていました。

⑦北海道農業研究センターとさっぽろ羊ヶ丘展望台

明治39（1906）年、二里塚に「農商務省月寒種牛牧場」が設置され、乳製品の作り方や羊毛や毛皮の利用方法など、酪農に関する研究を行っていました。その後、「月寒種畜牧場」、「畜産試験場北海道支場」などと名称を変え、昭和24（1949）年に「北海道農業試験場月寒試験地」となりました。

翌25（1950）年には、琴似にあった農業の研究施設「北海道農業試験場」と合併したため「北海道農業試験場畜産部」となりました。

昭和41（1966）年には、すべての研究施設が羊ヶ丘に集まり、平成13（2001）年に独立法人化し「農業技術研究機構 北海道農業研究センター」に再編されました。



写真-9 羊ヶ丘に放牧されている羊（昭和35年）

その後、平成 27 (2015) 年に「農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター」となり、北海道地域における農業や畜産の発展に必要な研究を行っています。

また、昭和 34 (1959) 年には、ここの一角にさっぽろ羊ヶ丘展望台が完成しました。クラーク博士像をはじめとする札幌ゆかりのモニュメントやレストハウス、チャペルなどが整備され、道内有数の観光名所として親しまれています。

⑧北海道立産業共進会場

「月寒グリーンドーム」の愛称で呼ばれた同施設は、家畜共進会の開催を目的として造られ、昭和 47 (1972) 年に開業しました。北海道農政部の所管で運営され、日本初の総合畜産共進会場として、4 年ごとに開かれる「北海道総合畜産共進会」や競走馬の競り市といった畜産関係の催事の他、スポーツやコンサートなど各種イベントにも使用されました。

昭和 57 (1982) 年には北海道博覧会が開催され、およそ 268 万人の来場者が訪れるなど好評を博しました。

平成 28 (2016) 年に、施設の老朽化や北海道立総合体育センター（北海きたえーる）、札幌ドームなどの大規模イベントが開催できる屋内施設が完成したことからその役目を終えました。

施設解体後の土地には、大型商業施設が造られた他、展示・見本市会場の整備が計画されています。

4 林業

豊平村に住んでいた阿部与之助氏は、明治 30 (1897) 年、精進川沿いに 130 町歩（約 129ha）の地を選定して、大掛かりな植林を始めました。この場所は阿部造林地と呼ばれ、大正元 (1912) 年に北海道の模範林として、大日本山林会から有功章が贈られました。

豊平町時代は、現在の南区にある簾舞、盤の沢（現在の常盤）、定山溪、

白井川などに御料林と呼ばれる国有林がありました。そこでは、夏は植林、冬になると伐採が行われ、馬そりに積まれて山から里に運び出されました。昭和の初めころからは、この木材の搬出に、西岡に住む多くの農家が従事したようです。冬の間の収入を得るため、農民たちは、この仕事に自分たちの馬を連れて参加したといわれています。



写真-10 伐採の様子（明治時代）

また、明治時代の中ごろ、札幌で木材屋をしていた遠藤石太郎氏は、営林署の払い下げを受けて、定山溪の山の木を切り出しました。伐採された木は、豊平川の流れを利用して運び、現在の中の島 1 条 11 丁目あたりから精進川に送り込まれ、中の島 1 条 1 丁目・2 条 1 丁目付近で受け止められました。

川から引き上げた木材は、現在の水産研究・教育機構札幌庁舎から土木研究所寒地土木研究所の辺りに、5～6m の高さで、何カ所にも積み上げられていました。この付近は土場（木材置き場）と呼ばれ、多いときにはここで 200～300 人ほどの人が働いていたそうです。この木材は、馬車に積まれて札幌や小樽、また旭川をはじめとする道内各地に運ばれ、主に建築用に使われました。

大正 7 (1918) 年になると、定山溪鉄道が開通し、鉄道で木材が運び出されるようになったので、川を使った運搬は行われなくなりました。

豊平地区には定山溪鉄道によって運び出された木材が集まり、地区の発展に大きく貢献しましたが、昭和初期の不況や戦争の影響を大きく受けました。戦後になると、混迷の中から立ち上がり、昭和 30 年代には、高度経済成長の波とともに、大きく成長しました。しかし、二度のオイルショック（昭和 48 年と 54 年）による不況と、低価格の外国産木材の輸入、都市化などの影響で、次々に撤退と廃業に追い込まれました。

コラム：北海道林業試験場

昭和15(1940)年、豊平に^{ていつりん やきよく}帝室林野局の北海道林業試験場が創設されました。昭和22(1947)年には、内務省所管の北海道林業試験場(現在の江別市野幌にあった)と豊平の林業試験場が合併して、林業試験場札幌支場が誕生し、その後林業試験場北海道支場と改称されました。

昭和49(1974)年に、この施設は羊ヶ丘に移転し、その後森林総合研究所と改称され、平成13(2001)年4月には独立行政法人森林総合研究所北海道支所となり、平成29(2017)年に国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所北海道支所となっています。

豊平にあった林業試験場の跡地は、現在、豊平公園(豊平5条13丁目)や温水プール、みどり小学校になっています。この辺りは試験林が植えられていたので、木々が多く残っています。



写真-11 昭和49年の庁舎移転まで使われていた豊平の林業試験場北海道支場

5 水産業

北海道さけ・ますふ化場

豊平区の水産業は、豊平川をさかのぼってきたさけ・ますや、小魚を捕まえるといった程度のものでした。しかし、中の島に「北海道さけ・ますふ化場」がありましたので、これについて紹介します。

「さけ」は、古くから北海道の代表的な水産物で、現在よりもはるかに貴重なものでした。しかし、産卵のために川をさかのぼる親魚を取ると資源が減るということを知らずに、大量に^{ほかく}捕獲したり、川の漁業権を争って漁を行ったりしていたところもあったようです。

日本がアメリカから人工ふ化の方法を学び、やがて、それが北海道に根付くのは、明治10(1877)年以降になります。明治21(1888)年には、千歳村(現在の千歳市)に官営の「千歳中央ふ化場」が設立されました。明治後期から大正にかけては、全道各地にふ化施設が設けられ、河川内における親魚の捕獲禁止と併せて、さけ・ますの増殖は人工的に管理されるようになりました。

その後、昭和9(1934)年に、北海道千歳鮭鱒孵化場を北海道鮭鱒孵化場と改称して本場とし、他に4支場設置するとともに、民営のふ化場を国営としました。昭和11(1936)年には、本場が中の島に移転し、千歳は事業場となりました。昭和27(1952)年に水産庁北海道さけ・ますふ化場となり、道立水産ふ化場が併置。本場となった中の島では、精進川の水を利用して、さけ・ますのふ化を行っていましたが、昭和の中ごろからふ化事業は行わなくなりました。



写真-12 水産庁北海道さけ・ますふ化場(昭和63年)

ふ化場は、平成9（1997）年にさけ・ます資源管理センターへ改組。平成13（2001）年には、独立行政法人へ移行し、平成18（2006）年に独立行政法人水産総合研究センターと統合し、さけますセンターとなりました。その後、平成23（2011）年に北海道区水産研究所と統合。令和2（2020）年、水産研究・教育機構札幌庁舎に再編されています。

6 鉱業

まぼろしあぶらさわ 幻の油沢油田

西岡に油沢と呼ばれているところがあります。

かつて、この沢では濃い緑色をした油がブツブツと湧き出ていました。西岡の開拓は、明治22（1889）年ごろから行われましたが、それより前の明治16（1883）年には、すでに油田を掘り当てるための井戸が作られたといわれています。そのころから、このあたりは「油沢」と呼ばれるようになりました。西岡だけでなく、福住や澄川からやって来て、ここから出る油をわらに染み込ませ、缶に入れて持ち帰り火種や灯油の足しに使ったり、馬車の心棒の潤滑油として利用したりしていたという話も残っています。

明治23（1890）年、27（1894）年にも、油田を掘り当てようとする人たちが、採掘を行うための申請を出しています。

明治30（1897）年11月14日付の小樽新聞では、油沢で取れる石油を「礦油質は善良にして重に機械使用に適するものなる由」と伝え、ここに資本金8万円の会社設立が計画されていると記しています。しかし、この計画はまもなく中止となり、その活動の跡は残っていません。また、



写真-13 油沢の石油試掘現場
(昭和9年)

昭和9（1934）年から2年続けて試掘が行われましたが、油層の発見は失敗に終わっています。

昭和32（1957）年10月ごろには、石油資源開発株式会社が現地調査を行い、11月には、高さ40mの鉄塔と250馬力のモーターを据えてボーリング作業を開始しました。当時、新鋭の機械と調査技術をもって行われた掘削は、地下2,000mにも達したそうです。しかし、自噴するほどの油層を発見することはできないまま作業は中止となりました。

現在、油沢に通じる水源池通沿いの西岡3条13丁目には、平成元（1989）年に建てられた「油沢の坂」の石碑があります。これは、坂の多い西岡で、地元の人たちが愛着心を持てるようにと7カ所の坂を選び、その坂道の歴史にちなんだ名称をつけ、後世に残そうとしたもののうちの一つです。



写真-14 「油沢の坂」の石碑

7 商業

豊平区は、もともと農業を中心に発展してきた街ですが、札幌の中心部に近い豊平地区には、商業や製造業で生計を立てた人が多くいました。また、軍の駐屯地であった月寒地区には、区内でもっとも早く商店街ができ、平岸通沿いにも、昭和になってから発展した大きな商店街が形成されています。

①豊平地区

豊平地区は、室蘭街道（現在の国道36号）や定山溪鉄道が通るなど、古くから交通の要衝として発展してきた街です。昔の人たちは、馬を交通機関として利用していたので、街道沿線には、馬車や馬そりの道具を扱う

馬具屋や蹄鉄屋が多いという特徴がありました。その他に、くわ、かま、なたなどの農機具を作る鍛冶屋や精米所、雑穀店も軒を連ねていました。また、札幌に泊りがけで来る人たちが利用した宿屋や日用品などを扱う雑貨屋、呉服屋なども繁盛していたようです。

大正7(1918)年に営業を開始した定山溪鉄道や、大正13(1924)年に豊平川を初めて渡った路面電車が、豊平の街を通るようになると、物や人を早くたくさん運ぶことができるようになりました。それにつれて、物を加工するさまざまな工場などができ、街の様子も変化していきました。

②月寒地区

月寒は、明治29(1896)年に軍の駐屯地となり、それをきっかけに商店街が形成されていきました。商店からは魚や豆腐など、さまざまな品物が軍に納められました。月寒あんぱんの元祖と言われる、碓井太七、本間荘四郎、大沼甚三郎氏たちは、明治時代からその名をかせ、軍への供給だけでなく、地方にも進出していたそうです。

大正10(1921)年ごろの月寒本通(現在の国道36号)沿いには食料品店や日用品店、雑貨店の他、風呂屋や下宿屋などが軒を連ね、たくさんの人でにぎわいました。

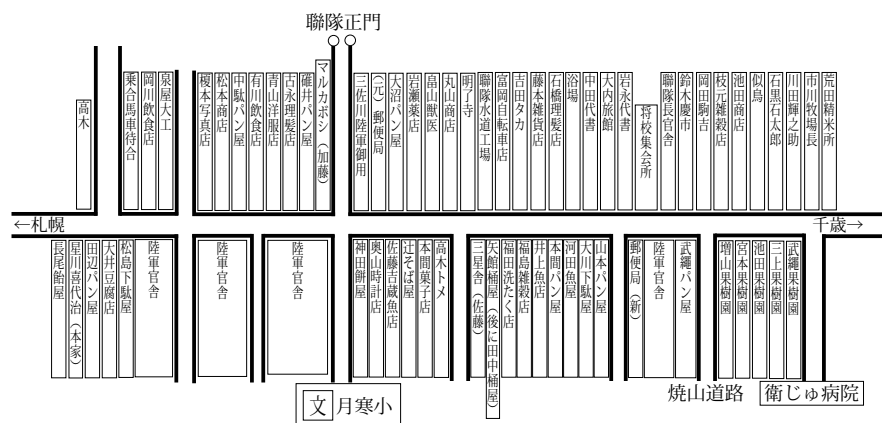


図-1 大正10年前後の月寒本通(豊平町史第七章六、商工業より)

また、昭和12(1937)年の日中戦争のころは、物資の統制によって自由販売の物品がほとんど出回らなくなり、商店個々の取引では商売が成り立たなくなりました。そこで、昭和15(1940)年には、資本を出し合い商業組合を設立して、物資の円滑な取引を行うようになりました。

終戦後は、各地に商工会や商交会といった私設の組織もつくられました。また、昭和28(1953)年には町の援助を受け、豊平町商工会という社団法人が結成され、中小企業発展のための策が取られるようになりました。

昭和25(1950)年の5月には、現在の月寒体育館がある場所で札幌競輪が開始されました。それに伴い、選手のための宿泊施設として、旅館が次々と開業しました。そして、昭和33(1958)年に月寒本通が拡張されると、2階建てや3階建ての建物が立ち並ぶ大きな商店街へと発展していきました。



写真-15 月寒周辺の国道36号(昭和52年)

③平岸地区

明治26(1893)年ごろ、山形県から来た木村孫太郎氏と妻トイさんが、現在の平岸3条14丁目で、農業をする傍ら、食料品や日用雑貨を売るようになりました。これが平岸における商店の始まりといわれていますが、平岸の商業が本格的に発展したのは、昭和に入ってからとなります。



写真-16 平岸通沿いの街並み(昭和52年、平岸2条7丁目付近)

のどかな田園風景が広がっ

ていたこの地域も、昭和 30 年代に宅地化が進みました。しかし、当時、平岸通（平岸街道：国道 453 号の一部）沿いにあった商店は、酒や雑貨を扱う店、理髪店、市場、金物店などで、数はそれほど多くありませんでした。昭和 46（1971）年には、平岸通も中央分離帯ができるなどして新しくなり、また、地下鉄の開通や札幌オリンピックの開催を契機として、通り沿いの商店街も整備されていきました。

平岸通沿いには、大小さまざまな店が軒を連ねており、国道 36 号沿いとともに、区内を代表する大きな商店街が形成されています。

8 工業

①月寒地区

れんが工場

開拓使は、発足当時かられんが作りに熱心で、函館付近で試作し、札幌で採れる粘土に着目し、利用しようとしてきました。明治 12（1879）年には、当時の工業局が月寒に「家屋瓦試験焼場」を造りましたが、瓦が札幌で普及することはありませんでした。



写真-17 増築中の大久保レンガ工場
(月寒東 3 条 11 丁目、大正時代)

明治 15（1882）年に、現在の月寒東 3 条 11 丁目付近で大久保レンガ工場が創立しました。この工場では、土管、れんが、かめ、瓦などを生産し、数十人の職人を雇い、月寒の産業の祖といわれました。また、明治 20（1887）年には横山レンガ工場が誕生し、この 2 つの工場で作られたれんがや屋根瓦が、歩兵第 25 連隊の建物に使用されました。大久保レンガ工場は昭和 20 年代後半まで続きました。

②豊平地区

醸造業

豊平地区では、古くからみそ・しょうゆを作る醸造業が営まれていました。明治時代の記録にも、豊平の醸造業について記述が残っています。昭和の初期には、国道 36 号に沿って多くのみそ・しょうゆ工場が並んでいました。これらの工場は、戦時中の統制により工場の統廃合が行われたため、終戦後には、その多くが姿を消してしまいました。

ゴム工業

札幌におけるゴム工業は、豊平から現在の菊水地区に集中していました。主に長靴や短靴を製造する工場が多く、多いときには、10 数軒の工場がありました。しかし戦後は、合併や移転、閉鎖などによりだんだん工場は減り、今では、姿を消してしまいました。

繊維工業

現在の豊平 4 条 9 丁目付近には、北海道製綱という会社がありました。この会社は、大正 7（1918）年、札幌における繊維工場としては帝国製麻に次いで 2 番目につくられました。ここでは、マニラ麻・中国麻を原料として、ロープ、漁網などを製造していました。

当時の道内では、規模の大きい会社で、豊平町に住む人たちが、たくさん働いていました。また、労働者の大半が女性で、札幌で初めて労働組合の婦人部が誕生したのも、この会社です。

製鋼業

昭和 12（1937）年、当時の豊平 1 条 9 丁目に野口製鋼所工場が設立しました。その後、昭和 17（1942）年に、豊平製鋼所と改名し、戦時には海軍省指定の軍需会社となりました。

終戦後は、株式会社豊平製鋼所となって、豊平に本社がおかれましたが、現在は豊平製鋼株式会社となり、西区の発寒鉄工団地に移っています。

③中の島地区

製氷業

昔は、中の島神社(中の島2条3丁目)から豊中公園(中の島2条1丁目)付近にかけて、水のきれいな5つの池がありました。大正11(1922)年、やましたともなり山下友成氏は、冬期間その池に張る氷を採る仕事を始めました。氷が厚くなるには長い日にちがかかるため、ひと冬に2回ほどしか採ることができませんでした。

氷を採るためには、池に積もった雪を払い、大きなのこぎりで氷を切り出します。切り取った氷は、倉庫に運び入れ、溶けないようにおがくずに包み、馬車を使って札幌の中心部まで運んでいました。

札幌が発展するにつれて、豊平川の上流から流れてくる水が汚れてきたため、池からきれいな氷を採ることができなくなりました。そこで山下氏は、昭和12(1937)年に、現在の中の島2条1丁目に工場を建て、地下深くから水をくみ上げ、札幌で初めて機械による製氷を始めました。当時、一日の出荷量は15トンほどで、主に魚屋、氷水屋、病院などにおろ卸されていました。

昭和30(1955)年には、市内の製氷店が集まり、札幌製氷協同組合が設立されました。この組合では、機械を使って氷を製造しました。その結果、昭和50(1975)年には、一日80トンもの氷を出荷できるようになり、さまざまな場所、用途で利用されるようになりました。

札幌製氷協同組合の工場は、平成8(1996)年からは別の会社に姿を変えて、しばらくの間は氷の生産が続けられていました。



写真-18 豊平川製氷切り出しの光景(昭和初期)

道路・橋

- 1 札幌越新道
- 2 本願寺道路
- 3 札幌本道・室蘭街道・弾丸道路
- 4 アンパン道路
- 5 水源池通
- 6 平岸街道
- 7 豊平橋
- 8 幌平橋

1 札幌越新道ごえ

道路が造られる前は、鹿などの動物の通り道を歩いたり、川を使って人や物を運んだりしていました。このような方法は、大きな労力を必要とし、時間もかかるので効率の悪いものでした。そこで、当時の箱館奉行は銭箱はこだてぶぎょうぜいばこ（現在の小樽市銭函）に注目しました。銭函から札幌方面へ道路を造れば、楽に早く人や物資を運ぶことができるからです。

銭箱から豊平を通して千歳・勇払ゆうはらに至るこの道路は、安政4（1857）年には開削が行われ、「札幌越新道ごえ」と呼ばれました。この道路は途中豊平川を渡りますが、まだ川を渡る橋は無く、河畔に渡し守を置くことになりました。ここは宿泊所も兼ねていましたので、旅人が多く集まる場所となり、商店が並ぶようになっていきました。

2 本願寺道路

明治の時代に入るまでは、北海道は蝦夷地えぞちと呼ばれていました。明治政府は、国を守る上で蝦夷地を開拓することが必要と考え、明治2（1869）年7月、蝦夷地に開拓使を置き、地名を北海道と改めました。そして、開拓使の中心となる本府を札幌に設けることにしました。その工事は明治2年から始められました。

時を同じくして、東本願寺が道路の開削を政府に請願したのを受けて、明治3（1870）年9月、平岸から定山溪、中山峠を経由して有珠までの道路（国道230号の前身）の開削が認められました。東本願寺は百人余りの開拓隊を北海道に派遣し、道路を切り開きました。この道路は本願寺道路と呼ばれ、明治4（1871）年7月に完成したといわれています。

この工事は東本願寺が私的に行ったもので、かかった費用や工事の期間、道路の造り方などはっきりしていない部分があります。

3 札幌本道・室蘭街道・弾丸道路

開拓使は、北海道開拓のための顧問こもんとして雇ったアメリカ人・ケプロンやとから「札幌に本府を置くには、函館・室蘭との連絡道路が必要である」との報告を受けて、函館～室蘭～苫小牧～札幌（豊平橋）間の道路を造ることを決めました。

工事は明治5（1872）年3月、ケプロンらのお雇い外国人の指導によって始められ、完成したのは明治6（1873）年6月のことでした。この道路は「札幌本道」と呼ばれ、馬車が通ることを前提に造られたものとしては、日本で初めての長距離道路です。

このうち、札幌から室蘭までの間は「室蘭街道」とも呼ばれ、昭和28（1953）年に国道36号となりました。特に札幌から千歳の間だんがんの34.5kmは北海道で初めてのアスファルト舗装となって「弾丸道路」と呼ばれていました。弾丸道路の名は、「弾丸のようにスピードが出せるから」、「急ピッチで工事が進められたから」、「米軍が駐留ちゅうりゅうしていたころ、弾薬を積んで運

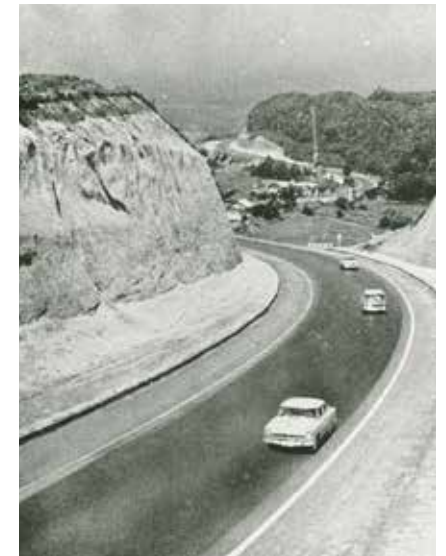


写真-1 昭和35年ころの国道36号



写真-2 推奨土木遺産の銘板

んでいたから」などのいろいろな説があります。令和3（2021）年には、積雪寒冷地や自動車高速走行のための先駆的な設計基準を導入し、北海道に限らず全国の道路改良の指標となったことにより、土木学会の選奨土木遺産に認定されました。

4 アンパン道路

明治43(1910)年4月、豊平町役場が^{おおあざ}大字豊平村から大字月寒村へ移転しました。このころは、平岸村から月寒に直接通じる道がなかったため、平岸村の人々が役場に行くには大変不便になりました。そこで、豊平町は平岸から月寒へ直接行くことができるよ



写真-3 アンパン道路の工事(明治44年)

う新しい道を作ることにしました。現在の道路でいうと、平岸小学校付近から白石藻岩通を東に向い、羊ヶ丘通との交差点付近で^{なな}左斜めに曲がり、月寒児童会館の横を通して国道36号までがこの道路です。

この道路は^{きふく}起伏が激しいことと^{はげ}水田を埋め立てなければならないことなどから、とても大変な工事だったので、当時月寒にあった軍隊の応援によって工事が進められました。工事の期間、兵士には毎日「アンパン」5個が間食として配給されました。このことから、この道路を「アンパン道路」と呼ぶようになりました。アンパン道路は明治44(1911)年10月に完成しました。

5 水源池通

水源池通は、西岡水源池から北方向に札幌大学、月寒体育館を經由して白石区の厚別通につながる道です。この道は、もともと月寒に設置された陸軍歩兵第25連隊に給水した月寒水道の^{いじ}維持管理のために造ったものですが、鹿の通り道を利用した道路であることから「シカ道」と呼ばれていました。そのため、ずいぶん曲がりくねった道になっています。

6 平岸街道

平岸街道は、開拓使が現在の平岸3条1丁目から18丁目にかけて原生林を一直線に切り倒して開いただけの道路でした。この道路に沿って62区画に土地を分け、ここに明治4(1871)年、開拓移民が移住しました。移住した人たちは、割り当てられた土地を開削しながら、木の根を抜くなどして、道らしい道を造ったそうです。

当初、飲み水は豊平川までくみに行っていましたが、明治6(1873)年に道路の中央に用水堀「平岸^{ほりわり}掘割」を造り精進川から水を流しました。この堀は昭和36(1961)年に埋め立てられるまで、使われていました。

現在、この道路は平岸通と呼ばれ、国道453号の一部として、重要な幹線道路となっています。

7 豊平橋

安政4(1857)年には札幌^{ごさ}越新道の開削が行われましたが、この道路は途中、豊平川を横切っていました。このころは、まだ橋は無く川の右岸と左岸に^{わた}渡し守を置いて、対岸に向かう人や物を運ぶ役目をしていました。

この川に初めて橋が架けられたのは明治4(1871)年のことで、丸太で造られた橋が2本架けられたものでした。川の流れは速く、水かさが増せば簡単に流されるような構造でした。その後、「橋を架けては流される」の連続で、一年に何度も架け直した年もあったようです。

こんな簡単な構造の橋では、豊平川の急流には^た太刀打ちできないことから、アメリカの技術を取り入れることにしま



写真-4 豊平川に架かった初期の橋(明治4年)

した。アメリカ人のホルトが設計し、明治8（1875）年に完成した橋で、弓形の補強材が付けられた木造の本格的なものでした。それでも、豊平川の洪水には耐えられず、同10（1877）年4月に流されてしまいました。



写真-5 豊平橋の工事の様子
(大正12年、手前が豊平側)

明治11（1878）年には、同じくアメリカ人のホイラーが設計した橋が架けられました。ホルトが設計したものと同型のものでしたが、川岸を埋め立てることで橋を短くし、修理や補強を加えながら、構造上耐えられる程度の10年間にわたり使用することができました。



写真-6 豊平橋の完成を祝う人々
(大正13年8月26日)

その後、技術も進歩し、日本人の設計による橋も架けられるようになり、洪水で崩れ落ちる橋もありましたが、ほとんどの橋は寿命となるまで使われました。

そして、ついに大正13（1924）年、永久橋として登場したのが、3連のアーチ型をした橋です。藻岩山を背景にした美しい姿は、旭川の旭橋、釧路の旧幣舞橋ぬさまいとともに、北海道の三大名橋といわれたほどです。

ところで、この橋が完成した大正のころ、交通機関は馬車を中心でしたが、時代とともに自動車主流となって、交通量も年々増えていきました。国道36号はもともと主要幹線として、特に交通量の増え方が大きかったです。そこで、国道の幅を広げることになり、それにあわせて豊平橋を架け替えることになりました。

架け替えのための仮橋が架けられ、昭和40（1965）年5月、名橋とたたわれた橋は市民の惜しむ声の中、解体工事が行われました。そして、翌年の昭和41（1966）年10月、名橋を引き継いだ最新の橋が完成しました。これが、現在架かっている豊平橋です。道路に合わせた幅27mの機能的なもので、平成13（2001）年の秋には交差点部分を広げるなどして現在に至っています。

8 幌平橋

幌平橋は昭和2（1927）年に河合才一郎かわい さいいちろう氏が私財をもって架けた橋で、札幌と平岸を結ぶことから札幌の「幌」と平岸の「平」をつなげ、幌平橋と名付けられました。

それまでは、中の島から川を渡るためには、渡し舟に乗るか、豊平橋まで遠回りをするな



写真-7 建設中の幌平橋（昭和28年）

ければならなかったため、幌平橋は大変重宝され、多くの人に利用されたようです。しかし、木製のこの橋は、洪水などの影響もあって、傷みが激しく、昭和6（1931）年ころから、住民から北海道庁などに橋を架け替えるようにと要望が出されるようになりました。

そして、昭和12（1937）年になってようやく、北海道庁がこの橋に通じる道路を新たに造るとともに、橋を架け替えました。その後、昭和29（1954）年に架け替えられ、平成7（1995）年には今の4代目幌平橋が完成しました。

交通機関

- 1 馬車の登場
- 2 定山溪鉄道
- 3 市電豊平線
- 4 路線バス
- 5 地下鉄

1 馬車の登場

大正時代に入ると、人の行き来も活発になり、いくつかの交通機関が登場してきました。

それまで人力車が唯一の交通機関だった月寒・札幌間には、大正の初めころに客馬車が走り始めました。4人乗りの黒塗りで、最盛期には20台以上もありましたが、冬には馬そりに代わりました。



写真-1 月寒を走っていた客馬車（大正時代）

2 定山溪鉄道

大正7（1918）年、白石から、豊平や平岸を通して定山溪^{いた}に至る定山溪鉄道が開通しました。温泉^{とうじ}で湯治をする人たちの足として、また木材や鉾石の輸送手段として、鉄道の必要性が高まったことを受けての開業でした。

当時は“豆機関車”と呼ばれた蒸気機関車が客車や貨車^{けんいん}を牽引しており、傾斜の急なところでは、いったんバックして勢いを付けて上るといような、のどかな風景も見る事ができたようです。

その後、昭和4（1929）年には、輸送力の増強や急勾配^{きゆうこうばい}対策のため、東札幌～定山溪間が電化され、100人乗りの大型電車も登場しました。また、電化に合わせて、豊平駅を当時の市電豊平線の終点近くに移転。観光客は、市電と定鉄を乗り継いで、定山溪へと向かったのです。豊平駅周辺は、乗り換え客を当て込んだ商店が立ち並び、にぎわいを見せました。

戦時中には観光客が減少し、利用者は沿線住民や疎開^{そかい}者のみとなり、鉾石や石材を運ぶ貨物輸送に重点が移っていきました。そして、戦争が終わると、真駒内に米軍キャンプが設置されたことや、定山溪鉄道自体の熱

心な営業活動によって観光客が戻ってきたことなどにより、乗客も増えてきました。豊平駅からは、中秋の名月を楽しむ「月見電車」が走るなど、趣向を凝らした企画もあり、人気を呼びました。また、貨物の取り扱いも引き続き好調なまま推移しました。昭和32



写真-2 定鉄の車両（昭和35年ごろ）

(1957)年には、当時の国鉄札幌駅までの気動車の乗り入れが実現し、翌年には豊平駅が新築されるなど、まさにこの時期が定山溪鉄道にとっての全盛期だったのです。

しかし、次第に道路の整備が進み、バスが交通機関の主流になってきたこと、自家用車が普及してきたことなどもあり、鉄道の利用者は徐々に減っていきました。貨物輸送も、小回りの利くトラックが利用されるようになり、鉄道の存続意義はだんだん薄れていきました。

昭和40年代に入ると、踏切事故の危険性を指摘する北海道警察の勧告や、地下鉄を建設するために路線用地の一部を買収したいという札幌市の打診もあり、ついに鉄道の廃止が決まりました。昭和44(1969)年10月31日、半世紀余りにわたって豊平を走った定山溪鉄道の歴史は幕を閉じたのです。

3 市電豊平線

大正7(1918)年に、札幌電気軌道株式会社が路面電車の営業を開始しました。そして、大正13(1924)年、豊平橋が永久鉄骨橋として生まれ変わったのを機会に、電車は初めて豊平川を渡り、豊平の大門通(現在の豊平3条2丁目付近)まで路線が延びました。鉄骨作りの大きな橋が電車渡る風景は、当時の札幌名物の一つでした。翌年には、平岸通(現

在の豊平3条5丁目付近)まで路線が延長されました。

昭和2(1927)年、電車事業は市営となり、同4(1929)年には、定鉄の豊平駅前まで路線が延長されました。当時は世界的な不況の影響で、輸送人員は人口増加の割には伸び悩んでいました。戦時中の昭和17(1942)年には、軍の要請により、月寒方面への路線延長が検討されましたが、実現はしませんでした。終戦までは、乗務員や資材の不足など、厳しい環境の中での運行が続きまし

た。戦後、社会が復興するにつれて、市電の再建も進みました。昭和25(1950)年には、終点から定鉄の豊平駅正面に引き込み線が作られ、乗り換えが一層便利になりました。まだ自家用車が普及する前のこの時代、路面電車は大量輸送手段の中心を担って発展を続けたのです。

豊平線の車内は、通勤通学客、買い物客、定鉄を利用する観光客などで大いににぎわい、特に、朝夕のラッシュ時の混雑は相当なものでした。乗客数の増加に対応するため、豊平線でも電車軌道敷内の舗装工事が行われるなど、整備が進みました。

しかし、全盛期は長くは続きませんでした。バスなどの交通機関や自家

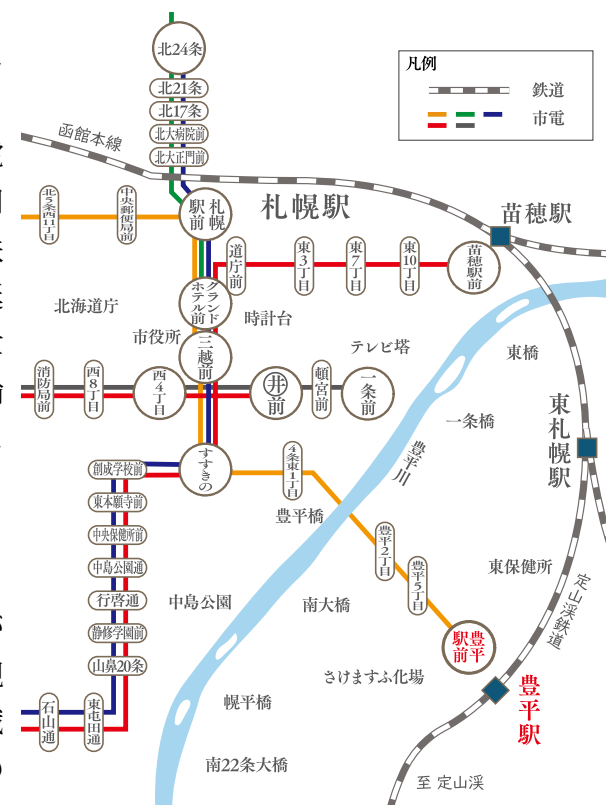


図-1 昭和39年頃の鉄道・市電をイメージした路線図

用車の普及に伴い、交通の混雑は年々深刻さを増していきました。特に市内の交通の大動脈ともいえる国道36号を走る豊平線は、直接その影響を受けることになります。昭和40（1965）年には、豊平橋の架け替え工事が始まり、翌年まで豊平方面の運行は休止され



写真-3 市電豊平線（昭和46年）

ましたが、すでにこのころには、電車の定時運行の確保が難しくなっていました。「車が増える→電車の速度が遅くなる→乗客がバスや自家用車を利用する→さらに車が増える→ますます電車の速度が遅くなる」という悪循環^{あくじゆんかん}が続き、利用者は徐々に減少していったのです。これに拍車^{はくしゃ}をかけたのが、地下鉄の開業計画です。豊平線自体は直接地下鉄と競合するわけではありませんでしたが、この計画は各路線の縮小に大きな影響を与えました。

結局、昭和46（1971）年9月30日、地下鉄南北線の開業を待たずに、市電豊平線は、半世紀近くにわたる歴史に終止符を打ちました。



写真-4 この日で廃止となる市電豊平線

4 路線バス

大正中期から後期にかけて、札幌でも自動車が輸送機関として登場してきました。当初は乗合自動車^{のりあい}という名称で、月寒・札幌間でも個人や民間会社のバス（といっても最初は数人しか乗れない小さなもの）が営業していました。

昭和18（1943）年には、北海道中央乗合自動車株式会社（現在の北海道中央バス株式会社）が設立され、豊平の路線を引き継ぎました。

戦後は、市営バスが豊平・平岸・中の島方面などを、また定鉄バスが西岡方面などを走り、地域の足として定着していきました。また、中央バスの路線も増え、運行本数も増加していきました。特に、国道36号では交通渋滞^{まんせい}が慢性化し、朝夕のラッシュ時にはバスが続けて何台もやってくるほどの混雑が日常的になっていきました。

市電豊平線が廃止され、地下鉄東豊線が開通した現在でも、区内には多くの路線バスが走っており、身近な交通手段として多くの区民に活用されています。

5 地下鉄

昭和30年代半ば、人口増加や自動車の普及などにより、札幌では交通渋滞が深刻化していました。昭和41（1966）年に冬季オリンピックが昭和47（1972）年に開催されることが決まると、交通渋滞の解消に加え、多くの選手や観客を会場に運ぶため、地下鉄の開発が決まりました。



写真-5 南北線のシェルター工事の様子

その後、冬季オリンピックが開催される前年の昭和46（1971）年12月に、地下鉄南北線（真駒内～北24条間）が開通しました。平岸の環状通付近で地上に出て、定山溪鉄道線路跡に建設された銀色に輝くシェルターの中をゴムタイヤで走る地下鉄は、当時、各方面から注目を集めました。

翌年、札幌市が政令指定都市となり、豊平区が誕生。区内の駅は、中の島、平岸、霊園前（現在の南平岸）の3駅でした。その後、昭和51（1976）

年に東西線（琴似～白石間）が、また昭和 63（1988）年には東豊線（栄町～豊水すすきの間）がそれぞれ開通し、市内の公共交通機関の主役として、市民の間にも定着しました。

そして、平成 6（1994）年、東豊線の延長区間である豊水すすきの～福住間が開通し、区内にも新たに学園前、豊平公園、美園、月寒中央、福住の 5 駅が開業しました。東豊線は、沿線の大学や高校に通う学生や札幌ドームを訪れる人たちなどの貴重な足として利用されています。



写真-6 東豊線開通式（平成 6 年）



写真-7 南北線車両

左から 3000 形、5000 形、2000 形。札幌市初の地下鉄となった 2000 形は平成 11（1999）年 6 月まで、3000 形は平成 24（2012）年 3 月まで活躍した。令和 5 年現在は 5000 形車両が運航している。

写真-8 東豊線 7000 形車両

初代東豊線車両として、平成 28（2016）年 6 月までに役目を終え、現在は 2 代目の 9000 形が走行している。



教 育

- 1 月寒小学校
- 2 豊平小学校
- 3 平岸小学校
- 4 中学校と高等学校
- 5 大学

1 月寒小学校

明治11(1878)年に月寒村の副戸長だった岩瀬末治氏が自宅で寺子屋のような学校を始めました。数カ月後、近くの農家の建物を改造した校舎を造り、月寒教育所を開設しました。

月寒教育所は、明治15(1882)年に公立月寒小学



写真-1 月寒小学校(昭和36年ごろ)

校と名前を変え、現在の月寒中央通7丁目に新校舎が建てられました。明治20(1887)年には月寒尋常小学校に、同34(1901)年には月寒高等尋常小学校に名前を変えました。そして、明治37(1904)年には現在の月寒西2条5丁目に、歩兵第25連隊の渡辺水哉隊長から土地と木材を、高木トメさんからは土地の寄付を、また、村民からは資金の寄付を受けて新校舎が建てられました。その後、何度か名称が変わって、昭和22(1947)年4月に月寒小学校となりました。

2 豊平小学校

豊平村は、豊平川を渡るとすぐ札幌で、札幌の学校に通うこともできたため、村内に学校ができるのは少し遅くなりました。明治14(1881)年に、阿部仁太郎氏らの有志によって経王寺の境内で寺子屋式の教育を始めました。そ



写真-2 豊平小学校(大正時代)

の後、明治17(1884)年に公立となり、明治25(1892)年には豊平尋常小学校となりました。その後、何度か名称が変わって、昭和22(1947)年4月に豊平小学校となりました。

3 平岸小学校

平岸村では、当初、札幌や豊平村の学校に通っていた児童もいましたが、学校は遠く、通学は大変でした。そこで、平岸村は北海道庁に学校の設立を申請し、明治23(1890)年に平岸村第二類尋常小学校が開校しました。最初は民家を使って勉強していましたが、村総代・中目文平氏らの有志の活躍によって6カ月後に新校舎を建てることができました。その後、何度か名称が変わって、昭和22(1947)年4月に平岸小学校となりました。

4 中学校と高等学校

豊平区内では、豊平町立月寒中学校が月寒小学校の校舎を使って、昭和22(1947)年5月1日に開校しました。翌23(1948)年2月には、旧北部軍司令官の兵舎だった建物を改修して校舎にしました。そして、昭和24(1949)年6月には同じ校舎内に札幌市立商業高等学校豊平分校(定時制)ができました。この高校が、現在の北海道札幌月寒高等学校です。

また、明治18(1885)年、当時の札幌区で開設した北海英語学校は、英語学科のみの北海道で唯一の中等教育機関でした。明治38(1905)年に私立北海中学校に改称し、同41(1908)年に現在の旭町4丁目に移転しました。現在は、学校法人北海学



写真-3 札幌月寒高等学校(昭和36年ごろ)

園が運営する北海高等学校となっています。また、同一敷地内には兄弟校の北海学園札幌高等学校もあります。

さらに、昭和 24（1949）年 12 月公布された私立学校法によって、私立学校の自主性が尊重されるとともに、公共性が高まり、豊平区内でも、私立の学校が次々と開校しました。もともと、運転技術の養成機関としてあった学校法人自動車学園（現在の学校法人北海道科学大学）が、昭和 27（1952）年、私立学校法に基づいて中の島に設立した学校が北海道自動車短期大学と北海道自動車学校です。4 年後の昭和 31（1956）年には北海道工業高等学校（現在の北海道科学大学高等学校、令和 5 年手稲区へ移転）を設立しました。そして、昭和 33（1958）年には、学校法人希望学園が月寒に札幌第一高等学校を設立しました。



写真-4 旧制・私立北海中学校
（現在の北海高等学校）

5 大学

令和 5（2023）年現在、豊平区内には 4 つの大学があり、市内でも学生数の多い区の一つとなっています。

最も歴史が古いのは旭町にある北海学園大学で、同大学は昭和 25（1950）年に開設された北海短期大学を基礎として、昭和 27（1952）年



写真-5 北海学園大学、北海商科大学

に北海道で初めての 4 年制私立大学として開設されました。区内には法学、経済学などの文系の学部が設置されています。同大学と隣接する豊平 6 条 6 丁目には北海商科大学が、昭和 52（1977）年に北見市に設置された北海学園北見大学を前身に、平成 18（2006）年に設置されました。

昭和 28（1953）年に中の島に開学した北海道自動車短期大学は、平成 26（2014）年に北海道科学大学短期大学部に名称変更し、翌年手稲区前田に移転。令和 4（2022）年に閉学しています。

西岡には、昭和 42（1967）年に開学した札幌大学があります。道内でも数少ない学群制を採用しており、経済学や経営学その他、歴史文化、スポーツ文化などの 8 専攻を設置。地域と共に新たな価値を創造できる人材の育成に努めています。



写真-6 札幌大学

東月寒では、令和 3（2021）年に日本医療大学が清田区から移転。文系学部が多い豊平区の中で、医療・福祉系学部の大学として、看護師や理学療法士などの教育を担っています。

各大学とも、地域と連携して、大学や学生と地域の人たちとの交流事業などを行っています。



写真-7 建設中の日本医療大学（令和 2 年）

旧陸軍

- 1 屯田兵
- 2 歩兵第 25 連隊と北部軍司令部
- 3 戦争の終結と旧陸軍施設のその後

1 屯田兵

札幌に軍隊が置かれたのは、開拓使の黒田清隆^{くろ だ きよたか}次官が、時の明治政府に、北海道に「屯田兵制度」を導入するよう提言したことに始まります。それは、土地の開墾^{かいこん}や他国の侵略から国を守ることが必要と考えたからです。

明治 8 (1875) 年から、琴似村と山鼻村、新琴似村、篠路村に兵員と家族のための住居、道路などが計画的に造られ、本州で募集した兵員が家族ごと移住するようになりました。

2 歩兵第 25 連隊と北部軍司令部

日清戦争時の明治 28 (1895) 年 3 月、屯田兵からなる第 7 師団が臨時に編成され、翌 29 (1896) 年には正式な第 7 師団となって、月寒村に歩兵、砲兵、工兵からなる野戦^{やせん}独立隊がおかれました。

明治 32 (1899) 年には歩兵隊を 25 から 28 の 4 つの連隊に分割し、翌 33 (1900) 年からは 26 から 28 連隊が旭川に移転したため、札幌には月寒の歩兵第 25 連隊のみが残ることになりました。

昭和 12 (1937) 年に日中戦争が始まると、札幌市と豊平町には軍の施設が次々と造られました。月寒には、昭和 15 (1940) 年に北部軍司令部が開設されました。この司令部は北海道、樺太、千島、青森、秋田、山形、岩手を管轄^{かんかつ}し、昭和 19 (1944) 年には第 5 方面軍司令部に改めて、北海道、樺太、千島に限定した作戦を担当することになりました。

その他にも、月寒には軍隊の訓練をする練兵場^{れんべいじょう}、兵隊が生活する官舎や病院なども造られました。これらの軍施設の所在地は、現在の月寒中央通 7 丁目付近にあたります。

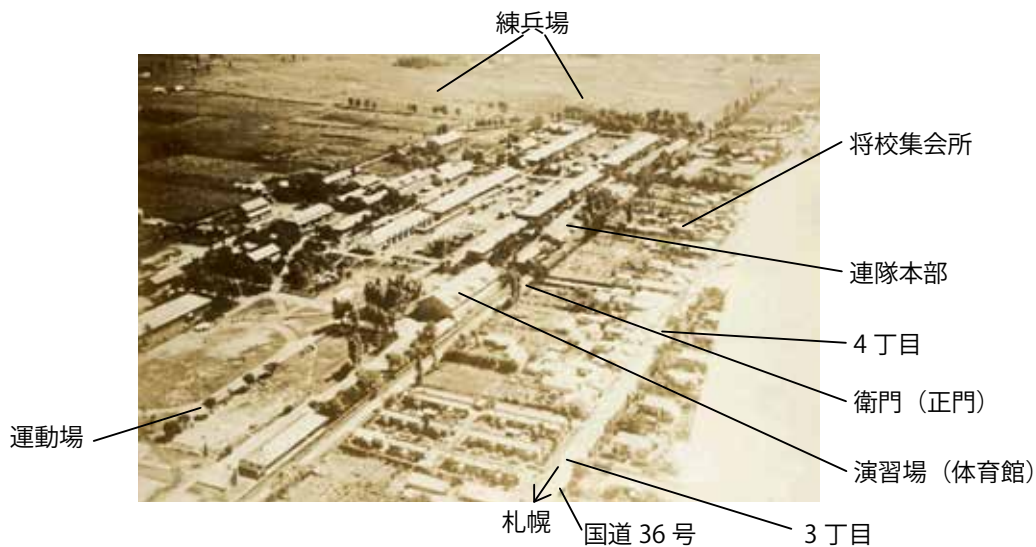


写真-1 歩兵第25連隊兵営

3 戦争の終結と旧陸軍施設のその後

昭和20年(1945)年8月15日、日中戦争から太平洋戦争へと拡大した長い戦争は終結し、日本は、アメリカを中心とした連合軍によって統治されることになりました。連合軍は、平和と民主主義を目指した政策を取り、外国に対して戦争を行わないように日本の軍隊を解散しました。

月寒にあった軍の施設も、学校や役場などの公共施設として使われるようになりまし

た。軍の小演習場や射撃場として使用されていた土地は、現在、月寒公園となっています。練兵場跡地は道営札幌競輪場、月寒運動広場を経て、昭和46(1971)年に月寒屋内スケート場となり、札幌オリンピック開催後は、月寒体



写真-2 歩兵第25連隊射撃場

育館となりました。北部軍司令部は月寒中学校、歩兵第25連隊の運動場は札幌月寒高等学校の運動場になっています。月寒東2条2丁目の北部軍司令官の官邸は、現在、地元の方々が「つきさつづ郷土資料館」として運営し、昔の貴重な資料や道具などを展示しています。



写真-3 つきさつづ郷土資料館

生活・出来事

- 1 消防
- 2 電気・上下水道
- 3 月寒公園
- 4 西岡水源池
- 5 墓地
- 6 火葬場
- 7 道営札幌競輪場
- 8 札幌オリンピック
- 9 住宅

1 消防

①御用火事と消防組

明治初期、開拓使の本府である札幌では、草ぶきの家が多くありました。

草ぶきの小屋は、燃えやすく、一度火がつくと次々と燃え広がるため、被害も大きくなり、また、市街地建設の妨げにもなっていました。開拓使は住居の建て替え資金を貸し付け、草ぶきの家を無くそうと努力しましたが、なかなか建て替えをするものは少なかったようです。

そこで、開拓使の岩村通俊判官は、官営の草ぶきの家を焼き払うことにしました。これが、明治5（1872）年に行われた御用火事です。このとき、一般民家へ火が移ることを防ぐため、岩村判官が大工組頭である中川源左衛門に命じて、中川組を結成させました。このような消防組織を消防組といいました。防災が重要であると考えた開拓使は、消防組を増やすなどして、防災体制を充実させていきました。

②豊平村の大火

豊平村では、阿部仁太郎氏を組頭とした消防組が明治27（1894）年に設立されました。これが、豊平で初めての消防組織です。それまでは、火事があると隣の札幌区の消防組が消火にあたっていたのです。このころの住宅は、木造で桁屋根というのが主流でした。燃えやすい材質のため、空気が乾燥し風が強い日に火事が発生すると延焼することがたびたびありました。このような悪条件によって大きな被害となったのが、明治33（1900）年5月20日に発生した「豊平村の大火」です。豊平村で発生した火事が強風によって燃え広がり、豊平川を越えて、南3条東4丁目の北海寺も全焼し、200軒以上が被害にあったというものです。

豊平村は札幌区に近いことから、早くから商業が発展し、建物が密集していました。そのため、火事が発生すると延焼し、被害が拡大することも多く、大正8（1919）年5月、大正14（1925）年5月にも100軒ほどが被害に遭う火災が起きました。

③中の島の大火

昭和 35（1960）年 5 月 2 日、中の島にあるアパートで発生した火事が、強い風によって延焼し、約 40 軒の家が被害にあいました。このころ、この周辺には防火井戸が設置されており、ポンプ車が井戸から水をくみ上げて放水することができたため、延焼を食い止めることができたといわれています。

④私設の消防組織から公設の消防組織へ

消防組のような私設の消防組織は、各地で建物が増えてくると必要に迫られ、それぞれの地域で組織されていきました。しかし、私設の消防組織はそれぞれが独自に活動していたため、市町村全体を考えると効率の悪いものでした。

本州方面では早くから私設の消防組織が乱立しており、全国の消防組を組織的に統一するため、明治 27（1894）年に「消防組規則」が作られました。規則では「市町村単位で消防組を設置し、費用はその市町村が負担する」と決められており、公設とするものでした。しかし、私設から公設への切り替えはなかなか進まず、豊平で公設の消防組が誕生したのは、規則が作られてから約 20 年後のことで、大正 2（1913）年 7 月のことでした。

その後、いくつかの変更を経て、昭和 12（1937）年に、公設豊平消防組の第 1 部を月寒に、第 2 部を平岸に置いた 2 部制をとりました。

⑤警防団

このころ、戦争での防空活動を目的とする防護団が全国的に組織されていました。この防護団と消防組を一つの組織にして効率的に運営するため、昭和 14（1939）年、警防団令が公布され、豊平町にも豊平町警防団が結成されました。

豊平町警防団は、本部と 6 つの分団（月寒・厚別・平岸・石山・みすまい簾舞・定山溪）があり、それぞれに消防部、警報部、配給部などがありました。こうして、消防組織は消防組から警防団へと代わったのです。

太平洋戦争が終わり、「消防組織法」が昭和 23（1948）年 3 月に施行され、各市町村が消防の責任を負うことになりました。翌 4 月、豊平町はこの法律に基づいて消防本部と消防団を設置したのです。これによって、ほぼ現在の消防組織に近いものになりました。

2 電気・上下水道

北海道で初めて一般用に電気が供給されたのは、明治 24（1891）年に札幌電灯舎が札幌市で開業したものといわれています。豊平では、月寒の陸軍兵舎、平岸、美園で明治 29（1896）年に初めて電灯がつけました。

札幌から遠く離れたところは、ほとんどが、太平洋戦争が終わった昭和 20（1945）年以降に電気が供給されたのです。

札幌は豊平川によってつくられた扇状地であるため、地下水が豊富でした。そのため水道はあまり必要ではありませんでした。しかし、歩兵第 25 連隊が置かれた月寒は高台にあるため、地下水をくみ上げるためには深く井戸を掘らなければならなかったのです。そこで、明治 42（1909）年（43 年の説もある）に月寒川をせき止めた西岡水源池から月寒の陸軍施設へ給水したのが、札幌の水道の始まりです。

一方、当時の札幌市では、昭和 12（1937）年に豊平川を水源とした藻岩浄水場が完成して、本格的な給水が始まりました。その後、浄水場の数も増え、昭和 47（1972）年には札幌市の水がめとなる豊平峡ダムの完成もあって、井戸水を使う家庭はほとんど無くなりました。

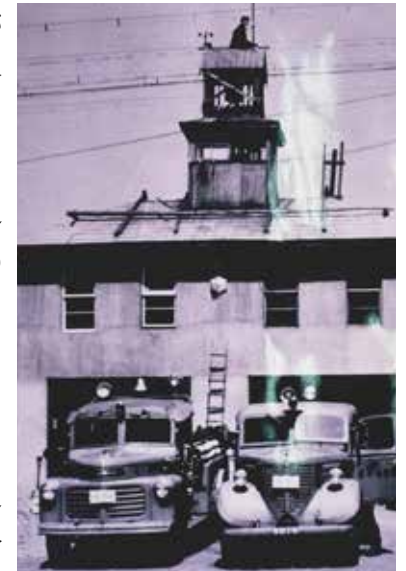


写真-1 豊平町消防本部
(月寒中央通 5 丁目、昭和 30 年)

3 月寒公園

月寒公園のある場所は、もともと農地として使われていました。この土地を当時の陸軍の渡辺水哉連隊長が千円で譲り受けて、兵隊の射撃などの訓練に使うようになりました。このときは干城台（かんじょうだい）と呼ばれました。その後、連隊長は歩兵第27旅団に移ることになったため、この土地を豊平町に寄付したのです。

豊平町は、明治43（1910）年にこの土地を公園にしました。昭和38（1963）年には、総合公園（休息や鑑賞、散歩、運動など総合的に利用できる公園）にするために5年計画で造成工事を開始し、ポート池や野球場、テニスコートなどを整備しました。

平成24（2012）年には、施設の老朽化に伴う再整備事業が始まり、部分的に施設改修工事などが行われ、令和2（2020）年に全面リニューアルオープンしました。



写真-2 月寒公園（昭和35年）

4 西岡水源池

西岡水源池は、明治末期、軍の施設に水道を引くために月寒川をせき止めてできた貯水池です。昭和46（1971）年に白川浄水場が完成するまで水道として利用され、昭和52（1977）年に公園として整備されました。平成13（2001）



写真-3 西岡公園（令和5年）

年には水源池にある取水塔が国の登録有形文化財になりました。現在は、水辺や湿地に住む生き物など、四季を通じて多様な野鳥や昆虫、植物などを観察できる公園として親しまれています。

5 墓地

北海道に開拓使が置かれ、多くの人々が移り住むようになりましたが、このころは、計画的に墓地を設置したのではなく、好きなどころに埋葬して自然に墓地になったのだといわれています。月寒村、平岸村、豊平村の3村にも、それぞれ墓地ができました。月寒共同墓地、平岸共同墓地、豊平共同墓地などです。現在、月寒共同墓地は月寒墓地（月寒西3条8丁目）、平岸共同墓地は澄川墓地（平岸2条18丁目）として残っています。

一方、当時の札幌区は、南6・7条西8・9丁目にあった区共葬墓地が手狭になったため、明治19（1886）年、豊平村の土地（豊平5条11丁目）に札幌区営の豊平墓地を設置しました。この墓地は、周辺の市街化などの理由で里塚霊園などに移転することになり、移転は平成8（1996）年に完了しました。現在、この場所は北海道立総合体育センター「北海きたえーる」になっています。

人口が増加し、将来、墓地が不足すると考えた札幌市は、豊平町字平岸に新しく墓地を設置することにしました。そうして昭和15（1940）年に使用が開始されたのが平岸霊園です。豊平町にある札幌市営の墓地という変わった形態となった平岸霊園は、大規模な公園式墓地としては、札幌市で初めてのものでした。



写真-4 豊平墓地

6 火葬場

駒崎 小 兵衛こまぎしやう べ え氏は開拓使の許可を得て、明治9（1876）年、南6条西8丁目に火葬場の経営を始めましたが、明治20（1887）年に廃止し、豊平村営共同墓地裏に移転しました。

明治38（1905）年には、豊平村がこれを買収し、同じ年、この火葬場を豊平村と札幌区の共同使用としたことから、名称を札幌共同火葬場と改めました。さらに、明治43（1910）年には、この地域が札幌区に編入されたため札幌火葬場となりました。

しばらくすると、火葬場設備が古くなり、火葬場としても適当な場所でないなどの理由で、豊平町や近くの住民から火葬場を移転するようとの要望が出されるようになったのです。そこで札幌市は、昭和19（1944）年、平岸霊園の隣に札幌市茶毘礼場（昭和23年、平岸火葬場に改称）を開設しました。

しかし、この火葬場もやはり設備の寿命と周辺の都市化の影響で、昭和59（1984）年、里塚斎場に業務を引き継いで、廃止となりました。

平岸火葬場の跡地には、平成元年（1989）年に平岸プールがオープンしています。



写真-5 平岸火葬場（昭和52年）



写真-6 平岸プール

7 道営札幌競輪場

冬はもちろん夏でもスケートができる月寒体育館（月寒東1条8丁目）。ここには、以前、競輪場けいりんじやうがありました。終戦後間もない昭和24（1949）年、住民の娯楽ごらくの場として、また、北海道の財源確保や自転車産業の振興しんこうなどの目的として造られた道営札幌競輪場です。



写真-7 道営札幌競輪場

もともと、月寒には陸軍の施設が多くありました。昭和20（1945）年に戦争が終わると日本の軍隊は解体され、月寒の軍施設はいろいろな施設に変わっていきました。競輪場もそのひとつで、兵士の訓練を目的とする練兵場れんべいじやうがあった場所に建てられました。昭和25（1950）年に第1回競輪が開催され、年々人気が高まっていきました。しかし、競輪の車券（勝者投票券）の購入は賭け事かで、風紀上好ましくないとの考えから、競輪場廃止の声が多くなり、昭和36（1961）年4月の北海道議会で廃止することが決められました。

8 札幌オリンピック

昭和47（1972）年2月、冬季オリンピックが札幌で開催されました。冬季大会は日本で初めて開催されるものでしたが、実は、昭和15（1940）年のオリンピックは夏と冬の両方が日本で開催されることに決まっていたのです。夏は東京で冬は札幌でした。しかし、日中戦争などの影響で中止することになりました。

その後、札幌市は、昭和43（1968）年の第10回大会に立候補しましたが、

投票結果は6都市中4位で、最終的に投票で1位となったフランスのグルノーブルで開催されることになりました。札幌市は、次の昭和47(1972)年の大会に3度目の立候補をし、今度は大差で念願のオリンピック開催が決定しました。オリンピックの開催が決まってからは、11の競技場が造られ、また、札幌の街並みはきれいに整備され大きく変わりました。

豊平区内では、月寒の道営競輪場があった場所に月寒スケート競技場が、西岡には距離競技場とバイアスロン競技場が造られました。

オリンピックは、国の内外から高い評価を得て終了しました。また、宮の森ジャンプ競技場で行われた70m級ジャンプでは日本人が金・銀・銅のメダルを独占するなどの活躍もありました。そして、月寒スケート競技場は月寒体育館、バイアスロン競技場は西岡バイアスロン競技場として、オリンピック後も多くの市民に利用されています。



写真-8 バイアスロン競技場

9 住宅

明治の初め、札幌の建物は火事に弱い草ぶきの屋根（わらで造った屋根）でしたが、明治後半になると、細長い板を連ねて並べる^{まさ}桧屋根が主流になっていきました。外壁も似たようなつくりでした。

^{まさ}桧屋根になっても、木製であるため火には弱く、雨・雪によって傷みやすいものでした。本州ではかわら屋根が普及していましたが、札幌では雪や凍結による破損を防ぐためのかわら屋根が高価であったため、一般の住宅には普及しませんでした。その代わりに、亜鉛を鉄板にメッキしたトタン屋根のスタイルが普及していきました。

昭和20(1945)年に太平洋戦争が終わると、出兵していた人たちが戻り、また、仕事を求める人たちが都市に集まるようになりました。

札幌市と豊平町も、引揚者向けなどの公営住宅をつくっていきましたが、需要には追いつかず、深刻な住宅不足の状態がしばらく続きました。

昭和30(1955)年、政府は住宅不足を解消するため「住宅建設10カ年計画」をたて、日本住宅公団（現在は独立行政法人都市再生機構）を設立しました。公団の目的は、質の高い住宅を供給することでした。公団は東京、大阪、名古屋に次ぐ大規模な住宅団地を平岸に造ることを決めました。

この団地は木の^こ花団地と名付けられ、鉄筋コンクリート2～4階建てで、ガス湯沸かし式の風呂、水洗トイレ完備で、水は水道水。そして、2DKや3DKと呼ばれたダイニングキッチンが付いた間取りが人気となり、昭和33(1958)年から36(1961)年にかけて45棟732戸が造られました。



写真-9 引揚者向けの住宅（昭和30年代）



写真-10 木の花団地（昭和36年）

各地区の歴史と今

- 1 豊平地区
- 2 美園地区
- 3 月寒地区
- 4 平岸地区
- 5 中の島地区
- 6 西岡地区
- 7 福住地区
- 8 東月寒地区
- 9 南平岸地区

※地区の区分けはまちづくりセンター所管区域別

1 豊平地区

「トイエ・ピラ」。アイヌ語で「崩れかけた崖」を意味する豊平川の川岸の一部の呼び名から「豊平」の地名がつけました。

安政4(1857)年、札幌越新道(現在の国道36号の一部)の開削が行われ、そのころ、豊平川に渡船場を設け、通行屋(渡し守)として、志村鉄一が定住しました。この渡し場は「樋平のわたし」と呼ばれていました。

旭町は、もともと「豊平〇条〇丁目」と呼ばれていましたが、昭和25(1950)年に「旭町」と呼ばれるようになりました。この名称は、リンゴの品種にちなんだとも、また、町の発展の期待を込めて付けられたともいわれています。

水車町は、かつて、この地域に水車があったことから名付けられたものです。もともとは「豊平〇番地」といわれていた地域で、大正時代には「水車通り」、昭和になってからは、「豊平川岸〇丁目」と呼ばれていたこともあります。

明治35(1902)年、3村に分かれていた豊平・月寒・平岸の各村が、「豊平村」として一つになり、豊平地区には村役場が設けられました。その後、明治41(1908)年に豊平町と改称され、明治43(1910)年には、現在の豊平地区に当たる豊平町大字豊平村の一部が札幌区に編入されました。

大正7(1918)年に定山溪鉄道が開通し、その後、豊平橋が鉄橋に架け替えられると、町の発展が進み、街道沿いには、馬具屋、蹄鉄屋、運



写真-1 最新調査札幌明細案内図(昭和3年)

送屋、飲食店など商店街が形成されていきます。また、昭和4（1929）年、市電が定鉄豊平駅まで延長されたこともこの地域の発展に大きな影響を与えました。その後、地下鉄建設や交通量の増加などの影響で、昭和44（1969）年に定山溪鉄道が、昭和46（1971）年に市電豊平線が廃止されました。

平成12（2000）年に留学生宿舎である札幌留学生交流センターと札幌国際ユースホステルの複合施設が開設され、国際交流の拠点となっています。

また、明治19（1886）年に開設された豊平墓地の跡地に、平成12（2000）年、北海道立総合体育センター（北海きたえーる）が開設されると、スポーツや音楽イベントなどが開催され、にぎわいを見せています。令和5（2023）年に、全国高等学校総合体育



写真-2 北海道立総合体育センター
（北海きたえーる）

大会が行われたときには、開会式の他、柔道やバドミントンなどの会場となり、全国から多くの高校生が参加し、熱戦が繰り広げられました。

地区内を通る国道36号には、昭和42（1967）年、定山溪鉄道および市電豊平駅の利用者の安全確保を目的として豊平横断歩道橋が設置されましたが、定山溪鉄道や市電豊平線の廃止でその使命を終えたことや老朽化、利用者の減少から平成27（2015）年に撤去となりました。また、国道36号の豊平4条8丁目から千歳間34.5kmの「弾丸道路」は、この道路で導入された技術などが、歴史的価値を認められたことで、令和3（2021）年に土木学会の土木遺産に選奨され、豊平4条8丁目には認定プレートが設置されています。（47ページ参照）

旭町には、明治41（1908）年に北海中学校が移転しています。現在は、学校法人北海学園（北海高校・北海学園札幌高校・北海学園大学・北海商

科大学：北海商科大学の所在地は豊平6条6丁目）となり、旭町は学園の街となっています。

水車町には、明治30年代から大正末期にかけて、豊平川の枝川（水車川）をまたぐように7軒の水車小屋がありました。小屋の中では、大人の背丈の2倍ほどの大きな水車が一日中回り続け、精米や製粉のための動力源として使われていました。



写真-3 復元された水車小屋

昭和初期に、電動の機械が導入されると、水車の姿は見られなくなってしまいました。昭和48（1973）年に、水車川が埋め立てられた後、昭和53（1978）年には、遊歩道として使われるようになりました。旭小学校には復元された水車があり、地域や子どもたちにまちの歴史を伝えています。

毎年8月に行われる「鉄一が里とよひらふれあいまつり」は地域の子どもたちや学生らをはじめ、多くの参加者でにぎわいます。

防災の取り組みは特に盛んで、毎年開催している避難所運営訓練では、地区全体から多くの方々が参加しています。

さらに、歴史講演会や歴史巡りを通じ、地域の歴史を次世代へ伝承する取り組みや、リンゴをかたどった交通安全マスコットを小学校の新一年生へ配布するなど、温もりのある地域づくりを進めています。



写真-4 豊平地区基幹避難所運営訓練（令和4年）

2 みその 美園地区

この地域には、明治6（1873）年に石川県の人々が移住してきました。同11（1878）年から水田を作り、早くから米作に成功した地域で、開拓当時は「望月寒川沿^{もつきざつぷかわぞい}」と称していました。

昭和19（1944）年に豊平町議会で「御園」と字名が変更されましたが、その後すぐに、現在の「美園」に修正されています。当時は、この地域で花き栽培をしている農家が多くみられ、春から秋にかけて花園のように花畑が広がっていたことから、「美園」と名付けられたといわれています。

戦後は、旧陸軍の射撃場跡に引揚者のための住宅が建つと、札幌市の発展ともあいまって、戦前は100戸に満たない集落だったものが、昭和40（1965）年にはおよそ6,200戸となり、美園は新興住宅地として急激な変貌を遂げました。

また、昭和28（1953）年には別名「弾丸道路」と呼ばれる国道36号が完全舗装化され、昭和31（1956）年には定鉄バスが月寒公園下～札幌駅間の運行を始めるなど、美園地域の交通事情も発展していきました。

地域の人口増加に合わせてるように、昭和30（1955）年に美園小学校と八条中学校が、同34（1959）年には豊園小学校が開校しました。また、美園地区町内会連合会の前身となる「美園自治会連絡協議会」も昭和34年に設立されました。

昭和63（1988）年には、美園連絡所・美園児童会館・美園会館が複合施設として完成し、平成6（1994）年には地下鉄東豊線が福住駅まで延長されて、美園駅が誕生しました。

明治14（1881）年、ヨーロッパ種としては日本初のリンゴ



写真-1 美園連絡所（昭和38年）

が平岸村に実り、その後、平岸リンゴの名は日本中はもとより、シベリアやシンガポールにまで聞こえるようになりました。

戦後、札幌市の急激な都市化の波が平岸地区にもおよぶと、由緒ある平岸リンゴは次第にその姿を消していきました。昭和49（1974）年、当時の板垣市長の提案により、街路にリンゴなどの実のなる木を植えることを検討することとなり、リンゴの果樹園があった美園地区の環状通中央分離帯に植樹することが決定され、同年11月に80本のリンゴの木が植えられました。（27～28ページ参照）



写真-2 環状通のリンゴ並木（昭和50年）

しかし、植樹を行った翌年の昭和50（1975）年、初めて実をつけたリンゴが1週間ほどでなくなってしまうという残念な出来事が発生。これを契機に、地域でリンゴ並木を守ろうとの機運が高まり、昭和51（1976）年2月に「美園リンゴ会」が結成されました。同会は現在もリンゴ並木の見守りや、環状通での植花活動など、美園地区の環境美化活動に加え、地域でのさまざまな活動にも協力しています。



写真-3 リンゴ並木の碑（美園11条7丁目）

昭和 51（1976）年、環状通のリンゴ並木の初収穫を祝う「豊平区民のつどい 第 1 回リンゴまつり」が開催され、リンゴみこしが区内を回った他、音楽隊のパレードなどが行われ大いににぎわいました。このお祭りは平成 11（1999）年に終了しましたが、平成 13（2001）年からは「美園リンゴまつり」として、地域のさまざまな団体と協力して開催されています。なお、令和 2（2020）年から令和 4（2022）年は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、美園リンゴまつりも中止されていましたが、感染も収まった令和 5（2023）年から再開することとし、「美園りんごマルシェ」という新しい形で再出発しました。



写真-4 豊平区民のつどい第1回リンゴまつり



写真-5 りんごマラソン（平成9年）



写真-6 美園りんごマルシェ（令和5年）

3 月寒地区

月寒地区は、明治 4（1871）年に現在の岩手県から 44 戸（43 戸の説もある）185 人が移住し、明治 35（1902）年に豊平村と合併するまでは、「月寒村」と呼ばれていました。

月寒の語源は、アイヌ語の「チ・キサ・プ」（われらが木をこするもの）という説と、「チ・ケシ・サプ」（丘の外れの下り坂）という説があります。月寒は「つきさつぷ」と読まれていましたが、北部軍司令部ができたとき、「つきさむ」と読むよう軍命令があったといわれています。また、移り住むようになった住民たちが「つきさむ」と読むことが多くなり、昭和 19（1944）年、豊平町議会で「つきさむ」と読むことに決定し、その年の 10 月に道庁から正式に告示されました。

明治 29（1896）年に、旧陸軍歩兵第 25 連隊が置かれ、およそ 1,700 人の兵隊が入営したことにより当時 2,500 人だった月寒村の人口は飛躍的に増加し、兵営の周辺には日用品や飲食店などの商店が並びました。明治 43（1910）年には豊平町役場が移転されるなど、古くから豊平町の中心地として発展しました。また、この時の役場の移転に伴い、平岸と月寒をつなぐ「アンパン道路」が住民と軍隊の協力によって造られ、現在もその名を残しています。昭和 28（1953）年には、当時北海道で初となるアスファルト舗装された国道 36 号も完成しています。

昭和 36（1961）年に豊平町と札幌市が合併すると市役所月寒支所が置かれました。同じ年に、かつて軍の射撃場であった土地が総合公園として整備され月寒公園となり、現在も市民の憩いの場となっています。また、かつての陸軍練兵場であり昭和 35



写真-1 月寒公園（昭和37年）

(1960)年まで道営札幌競輪場、その後市営月寒スケート場として利用されていた跡地は、昭和46(1971)年に月寒屋内スケート競技場(現在の月寒体育館)としてオープンし、翌年の札幌冬季オリンピックのアイスホッケー試合会場となり熱戦が繰り広げられました。

昭和47(1972)年に札幌市が政令指定都市となると、月寒支所は豊平区役所仮庁舎となり、同49(1974)年に現在の平岸6条10丁目に庁舎が移転した後、月寒には月寒連絡所が設置されました。



写真-2 豊平町役場周辺(昭和三十五年ごろ)

昭和60(1985)年には、旧北部軍司令官官邸を保存するため「つきさっぷ郷土資料館」を開館し、旧陸軍関係の資料のほか開拓当時の生活用具など月寒の歴史を物語る貴重な品々を数多く展示しています。なお、上述の「アンパン道路」と「つきさっぷ郷土資料館」はともに昭和63(1988)年にさっぽろ文化百選に選ばれています。

平成6(1994)年には地下鉄東豊線が福住まで延長されたことに伴い、国道36号沿いに月寒中央駅が開設され、交通の便が良くなりました。



写真-3 月寒体育館(令和4年)

月寒地区では「みんながいきいき にぎわいある月寒のまち」をテーマに掲げ、高齢者から若い世代、子どもまでが健康に生き生きと暮らすことができるまちを目指しています。単身高齢者の見守り活動の他、子育てサロンや地域食堂などによって、高齢者や子どもにやさしく、また世代間交流の場を設けることにも積極的に取り組んでいます。

さらには、夏まつり「フェスタつきさっぷ」や秋の音楽行事「親子ふれあいコンサート」、冬のイベント「ホワイトジャンボフェスタ」など、地域住民の交流と月寒地区の活性化を図るさまざまな取り組みが行われています。また、地域の情報を集約し広く知っ



写真-4 フェスタつきさっぷ(令和5年)

てもらうため開設したポータルサイト「つきさっぷ」に加えて、SNSなどで情報発信を行い、若い世代がまちづくりに参加するきっかけとなるよう取り組んでいます。



写真-5 ホワイトジャンボフェスタ(令和2年)

4 平岸地区

平岸という地名は、アイヌ語の「ピラ・ケシ・イ」（崖の・尻の・ところ）から名付けられたものです。

平岸地区は、明治4（1871）年に岩手県から65戸（62戸の説もある）203人が移住しました。当時は、製網の原料である麻の栽培が盛んだったため、「麻畑」とも呼ばれていました。



写真-1 用水堀があったころの平岸通（明治44年）

「平岸リンゴ」の名で知られているリンゴの栽培は、明治初期に開拓使がナシやサクランボなどと一緒に苗木を配布したことから始められ、その後、リンゴの栽培面積が増えていきました。

生活する上で欠かすことのできない「水」は、開拓当時、毎日豊平川までくみに行っていました。しかし、それでは農作物などに必要な水も不足するので、村民全員の努力と奉仕により「平岸掘割（用水堀）」を完成させました。この用水堀は、精進川取水口から水を取り入れ、天神山のふもとを経由して、平岸通（平岸街道）の真ん中を流して豊平川につながっていました。全長約5.3kmの用水堀を、約40日間で完成させたといわれています。この堀は、平岸通の拡幅のため昭和36（1961）年に埋め立てられました。平成5（1993）年に国道となった現在の平岸通は、南区真駒内方面に抜ける幹線道路として交通量が多く、道路沿いには大型商業施設や商店が立ち並び、にぎわいを見せています。

また、平岸には、北海道で最初の公団住宅「木の^こ花^{はな}団地」があります。日本住宅公団（現在の独立行政法人都市再生機構）が建設したもので、当時、近代的な住宅として人気がありました。平成以降、地区内では総合病院が建て替えられた他、高齢者施設が新設されるなど医療や福祉の施設も充実

しており、令和5（2023）年現在も、地下鉄南北線沿線を中心にマンションなどの集合住宅が増えている地域となっています。

平成30（2018）年12月、平岸通沿いの雑居ビルで大量のスプレー缶によるガス爆発が起り、52名が負傷し、41棟の建物が損壊するなどの被害が発生する事故がありました。重傷者はいなかったものの、住居の損壊や停電などのため生活に支障が生じた多くの方が平岸会館に一時滞在しました。

夏は夕やけ公園を会場に「平岸郷土芸能祭」が開催され、迫力ある平岸天神太鼓や平岸天神踊りの披露などのステージイベント、豪華景品が当たるビンゴ大会が行われます。また、地域を走る平岸通は、北海道マラソンのコースになっているほかYOSAKOIソーラン祭りの会場のひとつにもなっており、商店街や町内会をはじめとする地域の方々が運営に協力して祭りを盛り上げています。



写真-2 北海道マラソンの給水ボランティア（令和5年）

地区では福祉活動も活発に行っており、「ふれあいネットワーク平岸」（平岸地区福祉のまち推進センター）が、ボランティアによる相談窓口、子育てサロン「なかよしくらぶ」を定期的に開催するなど、少子高齢社会でのニーズに沿った事業を行っています。

また、札幌市は、平岸駅周辺地区を市内における地域交流拠点のひとつとして位置付け、令和元（2019）年に、「平岸まちづくり指針」を策定し、その取り組みをさらに推進するために令和5（2023）年に「平岸駅周辺地区地区計画」を策定しました。平岸地区の地域資源を生かしながら、地域の魅力をさらに高めるまちづくりが進められることとなっています。

5 中の島地区

中の島は、豊平川とその支流である精進川に囲まれた大きな中島であったことから付けられた名前です。明治時代は「中河原」、大正時代には「中島」と呼ばれていました。昭和8（1933）年ころから、「中の島」と呼ばれるようになりました。

中の島の開拓は、明治15（1882）年ころから始まりました。この辺りは川に囲まれた中島であるために、大きな石や砂利が多く、農耕地としては適していませんでした。また、たびたび豊平川が氾濫したため、この一帯は洪水に悩まされていました。

昭和5（1930）年に豊平川の堤防が完成し、洪水の心配が少なくなり、平岸と地続きになりました。昭和2（1927）年に完成した幌平橋や、平岸本村とを結ぶ道路の開通により、住民の行き来が容易になりました。洪水対策としては、その後、昭和46（1971）年に精進川から豊平川への排水のために精進川放水路が作られました。

中の島は農耕地としては適していませんでしたが、明治から大正にかけてリンゴやブドウなどの果樹栽培が始まり、大正・昭和初期から戦中にかけては、養鶏が盛んに行われました。また、きれいな水を生かし、さけ・ますのふ化（37ページ参照）や製氷（44ページ参照）が行われていましたが、いずれも戦後の宅地化とともに姿を消していきました。

中の島にある「北海道自動車学校」は道内で最も古くからの実績を誇る自動車学校です。その歴史は、大正13（1924）年、伏木田隆作ふしき だりゆうさく氏が中



写真-1 初代幌平橋
(昭和2年～12年)



写真-2 三輪自動車の練習風景（昭和29年）

央区の自宅に開設した「自動車運転技能教授所」に始まります。昭和6（1931）年に市内の自動車学校を統合して現在地に「北海道協立自動車学校」を開校し、同18（1943）年に現在の名称となりました。その後、昭和40（1965）年にそれまで砂利道だった教習コースは、約1万6千㎡の完全舗装に生まれ変わり現在に至ります。

精進川はかつてはコンクリート護岸の単調な川でしたが、平成4（1992）年から北海道の「ふるさとの川整備事業」として再改修事業が行われました。この事業により、既設の護岸を取り壊し、公園や住宅地などと調和した多自然型川づくりが進められ、精進川は地域住民の憩いの場となりました。

昭和46（1971）年、地下鉄南北線が開通して以来、中の島は、中の島駅から大通駅までは6分、札幌駅まで8分と利便性の高い住宅地として発展してきましたが、一方で都心近くにありながら豊かな自然が味わえるまちとなっています。



写真-3 精進川（令和4年）

中の島地区町内会連合会は、昭和54（1979）年、地域の急速な発展に対応するため、平岸地区町内会連合会から分離し、参加3町内会（1区～3区）で発足しました。昭和55（1980）年から昭和57（1982）年にかけてそれぞれの町内会が細分し、全体で10単位町内会となり現在に至っています。また、町内会、小中学校などがメンバーとなり平成5（1993）

年に「中の島魅力づくりの会」が発足（平成 20（2008）年「中の島魅力ある地域づくりの会」に改組）され、魅力ある地域づくりのためさまざまな事業を実施してきました。

毎年 5 月には、精進川で「ヤマメの稚魚放流」が行われています。この事業は地域住民の自然愛護や環境保全意識の向上のため、平成 10（1998）年から実施されており、秋には体長 20～30cm に成長したヤマメがサクラマスとして川に戻ってくる姿を目にすることができます。



写真-4 ヤマメの稚魚放流（平成 29 年）

また、冬には「中の島アイスキャンドル大作戦」を実施しています。この事業は平成 21（2009）年から実施されており、厳冬期にアイスキャンドルの雪あかりを住民と各種団体、関係機関が協働して灯すことにより、地域の連帯感を創出するとともに世代間の交流が深められています。



写真-5 中の島アイスキャンドル大作戦（令和 5 年）

6 西岡地区

西岡地区の開拓は、月寒村の一地区として明治 22（1889）年ころに始まり、当時は「焼山」と呼ばれていました。これは、開墾の火が周辺の森林に飛び火して、たびたび山火が発生したために、この名が付けられたようです。その後、明治 42（1909）年に「西山」と改称され、さらに、昭和 19（1944）年に現在の「西岡」に改称されました。月寒地区の西に位置し、丘陵地帯になっているので「西」に「山」または「岡」をつけたものです。

この地域は、火山灰に覆われた土地であったため、開拓当初の農業経営は苦勞を強いられました。明治 30 年代後半になると、ビールの原料となるホップの栽培が盛んになり、ビール会社の工場に出荷されていました。また、大正時代にはジャガイモ（焼山芋）も栽培され、海外に輸出された時期もありました。



写真-1 ホップ摘み（昭和 37 年）

戦後も種イモなどの農業が盛んに行われていましたが、道路の開通や路線バスの運行開始などにより、徐々に宅地化・都市化が進み始めました。昭和 36（1961）年の豊平町の札幌市との合併を契機に、昭和 39（1964）年に団地造成が始まり、人口が急増し、宅地化が進みました。

西岡水源池は月寒にあった陸軍への給水のために月寒川をせき止めた大きな貯水池でしたが、昭和 52（1977）年に西岡公園として整備され、現在は、川や池沼・湿地などの豊かな水環境を有する公園として、四季を通じてさまざまな生き物と出会える憩いの場所となっています。

平成の半ば以降、区内でもっとも高齢化率の高い地域となった西岡地区では、「ノルディックウォーキング」や「健康づくりセミナー」を開催するなど、健康増進に関する取り組みが積極的に行われるようになりました。また、毎年100人規模で開催される「パークゴルフ大会」や敬老の日になんで9月に行われる「ふれ愛交流会」にも、



写真-2 ノルディックウォーキング

毎回たくさんの方が集まり、高齢者同士の交流の良い機会となっています。

一方、地域が主体となって運営している「子育てサロン」による子育て世帯への支援にも力を入れている他、子どもたちの健全育成を願い、各町内会では夏祭りのイベントや子ども神輿みこしなども実施しています。

小学校の下校時に合わせて行う「交通安全街頭啓発」は、4月から11月まで地区内4か所で毎月実施し、各町内会や地元企業など1年間で延べ1,000人以上が参加するなど、子どもからお年寄りまで、誰もが安心安全に暮らせる、住みよいまちづくりを目指しています。



写真-3 交通安全街頭啓発（水源池通）

地域の中心部には札幌大学のキャンパスがあり、令和5（2023）年に初めて、大学の学校祭に町内会や商工振興会が出店協力をする形で、それまでの地域の「夏まつり」の形を変えて「にしおか地区まつり」を開催し、学生や地元の小中学生、地域の家族連れなどたくさんの方でにぎわいました。今後も地域のお祭りとして、継続・発展が期待されています。同じく同大学を会場に、毎年冬にはアイスキャンドルのイベント「西岡まちの灯り」を開催し、地域の人を楽しませています。



写真-4 にしおか地区まつり（令和5年）

また、特産品を作って西岡を盛り上げようと、商工振興会が中心となってオリジナルの地ビールを開発するなど、新たな試みを積極的に取り入れながら、地域を挙げてまちづくりに取り組んでいます。

また、特産品を作って西岡を盛り上げようと、商工振興会が中心となってオリジナルの地ビールを開発するなど、新たな試みを積極的に取り入れながら、地域を挙げてまちづくりに取り組んでいます。



写真-5 西岡まちの灯り（令和5年）

7 福住地区

明治4(1871)年、月寒に移住した開拓移民44戸のうち、6戸が月寒川を挟んで東側の少し離れた場所にあったことから、「六軒村」と呼ばれていました。当時は、歩行も困難な密林地帯や、ススキなどが生い茂る湿原が広がっていたことから、「茅野」とも呼



写真-1 六軒村(明治4年)

ばれていました。その後「月寒西通」と改められ、昭和19(1944)年に「福住」と改称されました。「福住」の地名は、福住寺(ふくじゅうじ)にあやかったとも、幸福の住む郷になるようにとの願いから名付けられたともいわれています。

開拓以降は農業を中心に発展、天候や地質による豊凶の差や井戸による飲料水などの確保に苦労しながらも、明治時代から月寒川周辺などで稲作が続きました。その他では、ソバ、大豆、小豆、麦などの主食となる作物の作付けから始まり、その後は開拓使以来の奨励作物のビール麦が中心となりました。大正時代には、軍馬の飼料となるエン麦、昭和に入ると、ジャガイモをはじめ、ニンジンやキャベツ、ハクサイなどの野菜が中心でした。

また、大正7(1918)年にリンゴの栽培が本格的に始まり、昭和25(1950)年頃には最盛期を迎え、平岸と並んで全国に知られるようになりました。

しかし、その後の相次ぐ台風や寒波、リンゴの木の病気などにより、昭和32(1957)年以降になると、農地が買収され、次々と住宅地の造成が進められました。昭和45(1970)年には市街化区域に指定され、さらに宅地化が加速しました。

リンゴの木はほとんどなくなりましたが、貯蔵庫であったレンガ倉庫や札幌軟石の倉庫、家畜の飼料を保管していたサイロの中には現存するもの

もあり、かつて農業が盛んであったことがしのべられます。

平成に入ると、6(1994)年に、地下鉄東豊線の豊水すすきの～福住間が開通。市内中心部や新千歳空港などへの利便性が高くなり、福住駅周辺などでマンションも増え、人口が増加しました。また、通勤・通学などの利用に加え、隣接する札幌ドームや羊ヶ丘展望台へのアクセスの拠点にもなり、毎日多くの人往来するようになりました。

こうしたことなどから、西岡地区町内会連合会の一部であった福住の町内会は、平成9(1997)年に西岡から分割して福住地区町内会連合会を発足。まちづくりの拠点となる福住まちづくりセンターや福住地区会館、福住開拓記念館も同じ場所に併設されました。

福住開拓記念館では、昔の農機具や馬車など多数の展示物を保存しており、これまでの地域の歴史や当時の暮らしの様子を伺い知ることができます。

福住では、町内会や地区の福祉団体、交通安全関係団体、学校、行政などさまざまな団体と、これらが連携して活動を行うまちづくり協議会などが地区の活動を担っており、防災・防犯、交通安全、高齢者や子どもの見守り、交流や賑わいの創出、環境の美化などのまちづくり活動に取り組んでいます。

交通安全では、通学路を含む道路の安全を守るため、生活道路の一部の範囲について、最高速度を30km/h以内に規制する「ゾーン30」の指定と、平成25(2013)年からの区



写真-2 福住開拓記念館



写真-3 狭さく部(区画線とラバーポール)

画線とラバーポールで車道をあえて狭く見せて速度を低減させる（狭さく部）2つの取り組みを合わせ、令和4（2022）年、北海道内で初めて「ゾーン30 プラス」として指定され、更なる安全の向上に取り組んでいます。

毎年7月末から8月末頃には、各町内会や町内会連合会による祭りを開催しています。各祭りではさまざまな催しが行われ、連合会や福住巖島神社の祭りでは、子どもたちによる吹奏楽や和太鼓の演奏なども花を添え、各会場は大いに盛り上がります。

また、大晦日から1月2日まで、アイスキャンドルの点灯が行われ、福住巖島神社と福住まちづくりセンター周辺で優しい明かりが灯されます。

平成29（2017）年3月、福住では町内会やまちづくり協議会などの団体が一体となり、10年、20年先も住み続けたいまちづくりを進めることを目指し、「福住地区まちづくりビジョン」を策定。その際に話し合われた「ふくずみ憲章」も、後に決めました。

しかし、北海道胆振東部地震や新型コロナウイルスのまん延などによる取り巻く環境の変化により、多くの活動が中断・中止となったことを踏まえ、令和5（2023）年から6（2024）年にかけてビジョンの改定に着手するとともにさまざまな活動を見直し、再び10年後の未来と、未来の実現に向けた実行内容を策定することとしています。



写真-4 福住アイスキャンドル
（令和5年大晦日）

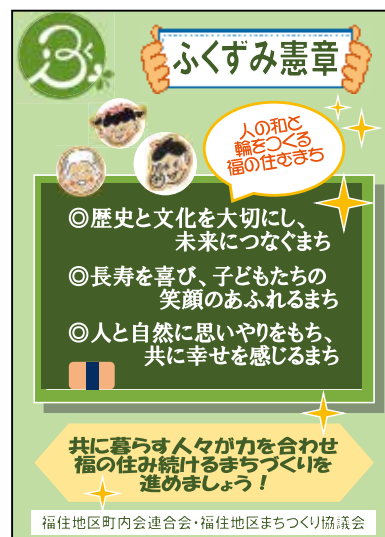


写真-5 ふくずみ憲章のポスター

8 東月寒地区

月寒地区の東側は、二里塚や八紘（はっこう）の字名で呼ばれていた時期もありましたが、戦後の改称で「東月寒」となりました（現在は、住所では月寒東〇条〇丁目となっています）。明治から昭和にかけて、牧場が多く開かれた他、農耕も盛んでした。八紘学園資料館は当時この地にあった吉田牧場のサイロと畜舎だった建物です。昭和7（1932）年には、月寒リンクスという18ホールの本格的なゴルフ場が誕生し、場内には牧舎のようなおしゃれな作りのクラブハウスがありました。



写真-1 開校時の八紘学園（昭和9年ごろ）

東月寒地区は昭和30年代から宅地化が進み、現在は閑静な住宅街が広がっていますが、八紘学園周辺にはかつての牧歌的な風景を見ることができます。一方で、かつて北海道立産業共進会場として使用されていたドーム施設が平成28（2016）年に閉館した後、跡地に大型商業施設ができた他、札幌市の新展示場の建設が予定されています。近隣には、令和3（2021）年に日本医療大学月寒本キャンパスが開設されています。

羊ヶ丘は、焼山（やけやま）（現在の西岡）の一部でした。明治39（1906）年に農商務省月寒種牛牧場が創設され、その後、大正8（1919）年には、月寒種羊場が設置されたことから、通称「種羊場」と呼ばれていました。そして、昭和19（1944）年の字名変更により「羊ヶ丘」と改称されました。昭和24（1949）年に種畜牧場（かつての種牛牧場）は廃止され、翌年から北海道農業試験場畜産部となり、同41（1966）年には全施設が羊ヶ丘に集まりました。ここは、日本の綿羊飼育のさきがけとなった場所でもあります。

羊ヶ丘の高台にあるさっぽろ羊ヶ丘展望台では、現在も羊の群れを見ることができ、札幌市内でも人気の観光スポットになっています。平成13(2001)年には、全天候型の札幌ドームが設置され、サッカーやラグビーのワールドカップが開催されるなど、数々のスポーツイベントが行われている他、コンサートや展示場などにも活用され、多くの人々が訪れています。



写真-2 クラーク像と札幌ドーム

ふれあい夏まつりや雪中運動会など、子どもからお年寄りまで楽しく交流を深めるとともに、ふるさとへの愛着を深める行事を行っている他、防犯パトロール隊による地域防犯活動など地域の安全・安心に関わる取り組みにも力を入れています。



写真-3 ふれあい夏まつり(とんつき憩いの広場)(令和5年)

9 南平岸地区

明治23(1890)年に現在の平岸小学校の前身である平岸村第二類尋常小学校が開校しました。明治44(1911)年に完成した平岸と月寒を結んだ「アンパン道路」の起点はこの小学校となっています。南平岸地区は、明治以降、平岸通に開削した用水堀を中心に、果樹園や水田で村が形成されました。平岸でリンゴの栽培が始まると、リンゴ園が広まり、一時は海外まで輸出されるほどのリンゴの一大産地となりました。



写真-1 南平岸アンパン道路看板

昭和30年代以降は宅地化が進み、平岸通の用水堀は埋め立てられ、現在は、商業施設が立ち並ぶ、主要な幹線道路となっています。平岸通から白石藻岩通に入った高台には昭和15(1940)年に完成した平岸霊園があり、お盆やお彼岸を中心に多くの人々が墓参に訪れます。霊園の隣にはかつて火葬場がありましたが、昭和59(1984)年に里塚斎場に業務を引き継ぎ役目を終えました。跡地には、平成元(1989)年に平岸プールが造られ、市内で唯一の50m長水路コースを完備した温水プールとなっており、数多くの全国大会や国際大会が開催されています。

昭和46(1971)年に、地下鉄南北線が開業。開業当時、今の南平岸駅は平岸霊園が近かったことから「霊園前」という駅名でしたが、平成6(1994)年に「南平岸」に改称され、「南平岸」の名がより広く知れ渡ることとなりました。地下鉄は、南平岸駅手前で高架となっており、地上を走る地下鉄のシェルターは、南平岸の風景のアクセントになっています。

標高89mの天神山は、住宅地に囲まれながらも、四季折々の表情が楽しめる自然豊かな緑地が形成され、住民の憩いの場所となっています。

かつてはこの天神山から一面のリンゴ園を見渡すことができました。西端には丘陵を利用して築いたチャシ(アイヌの砦)跡も発見されており、また斜面前面からは、縄文中期の土器や石器も数多く発見されています。



写真-2 天神山緑地(令和3年)

他にも、北海道最古の藤と言われる樹齢200年を超えた天神藤、相馬神社、平岸天満宮・大平山三好神社、石川啄木の歌が刻まれている平岸林檎園記念歌碑、札幌生まれの劇作家・小説家の久保栄文学碑、本願寺道路終点を記した石碑、世界中からのアーティストが滞在しながら作品づくりなどができる天神山アーティストアジオなどがあり、見どころがいっぱいです。



写真-3 天神藤(平成30年)

昭和43(1968)年には北海道テレビ放送(HTB)が開局。隣接する平岸高台公園は、同局の人気番組のロケ地としても全国的に知られています。HTBの社屋は平成30(2018)年に中央区へ移転してしまいましたが、令和3(2021)年には、平岸高台公園の園名碑がHTBから寄贈され、いまなお番組ファンの聖地として南平岸地区の名所となっています。

平成2(1990)年、地域の急速な発展に対応するため、平岸地区町内会連合会にて、南平岸地区の分割決議が行われ、平成5(1993)年に、南平岸町内会連合会が参加28町内会で発足しました。

令和5(2023)年現在、町内会連合会では、単位町内会間の経験交流や情報交換に力を入れ、特色ある事業を展開しています。住民同士が連携し発災に備える避難所開設研修「避難所チャレンジ」、町内の見どころを散策しながらごみ拾いをする「クリーンウォークみなみひらぎし」や「ごみ減量化・資源化研修会」などの町内美化、異世代交流と地域の魅力発見を目的とした「カルタ交流会」、住民の親睦・交流・健康増進をめざしたウォーキングやパークゴルフのサークル活動などを行っています。

この他、「まちづくりいきいき南平岸」や「南平岸商店街振興組合」などの取り組みとして、春は地域住民と地元の小中学生が協力して「花いっぱい運動」を行い街並みに彩りを添え、夏は「なんぴら夏祭り」でビアガーデンや縁日、ビンゴ大会などで大いに盛り上がります。また、秋に行われる「天神山文化祭」は地域紹介や交流を目的にJAZZライブやダンスなどさまざまな年代の方が楽しめるイベントです。さらに冬は、子どもたちが作ったアイスキャンデルのやわらかい灯りが会場を包み込む「アイスキャンデル@南平岸」が行われています。



写真-4 クリーンウォークみなみひらぎし

年 表

年 (西暦)	年 (和暦)	出来事
16000 年前		旧石器文化
8000 年前		縄文文化（丘陵部に多くの人々が生活する）
0～7 世紀		続縄文文化（現在の市街地まで生活の範囲が拡大）
8～13 世紀		擦文文化（植物園、北大から麻生まで集落が広がる）
13 世紀～		アイヌ文化
1669	寛文 9	アイヌ民族と和人との戦いに関する津軽藩の記録に、札幌市域に首長ヨウタイン、チクナシの二つの勢力があったことを記す
1700	元禄 13	松前藩、幕府に松前島絵図を呈上。製作年代のはっきりしている地図で札幌市域の地名が載った最初
1736～40	元文年間	石狩十三場所に場所請負制導入
1752	宝暦 2	材木商飛騨屋久兵衛、石狩山で伐木を開始。札幌市域は伐出場所と河口の木場とをつなぐ交通の要路
1807	文化 4	東蝦夷地の幕府直轄（1799）に続き、西蝦夷地も幕府直轄に。石狩十三場所のアイヌ民族の人口 2,285 人（西蝦夷日誌）、この後、労働力の強化や疱瘡の流行のために減少の一途をたどり、安政元年（1854）には 670 人（蝦夷日誌）
1857	安政 4	札幌越新道の開削が始まる。このころ、豊平川河畔に通行屋が整備され、志村鉄一が定住
1871	明治 4	岩手県人が月寒・平岸・福住に移住
1872	明治 5	月寒村・平岸村開村
1873	明治 6	札幌本道（室蘭街道、現在の国道 36 号）が開通
1874	明治 7	豊平村開村
1875	明治 8	初代の本格的な豊平橋完成
1896	明治 29	月寒に陸軍第 7 師団独立歩兵大隊（後の歩兵第 25 連隊）設置。月寒あんぱん販売開始
1900	明治 33	豊平で大火発生
1902	明治 35	豊平・月寒・平岸の 3 村が合併し、豊平村誕生
1906	明治 39	現在の羊ヶ丘に農商務省月寒種牛牧場（現在の北海道農業研究センター）開設
1908	明治 41	町制施行により豊平町と改称
1909	明治 42	札幌初の水道（歩兵第 25 連隊用）完成
1910	明治 43	大字豊平村の一部が札幌区に編入され、豊平町役場が豊平から月寒に移転
1911	明治 44	平岸連絡線（アンパン道路）が完成

年 (西暦)	年 (和暦)	出来事
1918	大正 7	定山溪鉄道開通
1920	大正 9	第 1 回国勢調査実施
1924	大正 13	永久橋としての豊平橋が完成し、路面電車運行。このころ、月寒・豊平間でバス営業開始
1927	昭和 2	初代幌平橋完成
1928	昭和 3	N H K 月寒放送所から道内初のラジオ電波発信
1929	昭和 4	定山溪鉄道電化
1931	昭和 6	二里塚（現在の東月寒）に札幌初のゴルフ場開設
1932	昭和 7	北海中学校出身の南部 忠 平がロサンゼルスオリンピック三段跳びで金メダル獲得
1940	昭和 15	北部軍司令部が月寒に開設（戦後廃止）
1942	昭和 17	戦闘機で訓練中の少年航空兵、玉田守が福住付近に墜落し、死亡
1953	昭和 28	国道 36 号の完全舗装完成（通称「弾丸道路」）
1955	昭和 30	豊平小学校全焼
1961	昭和 36	豊平町が札幌市と合併
1963	昭和 38	北海高校が選抜高校野球大会で準優勝
1969	昭和 44	定山溪鉄道廃止
1971	昭和 46	市電豊平線廃止。地下鉄南北線（真駒内・北 24 条間）開通
1972	昭和 47	札幌オリンピック冬季大会が開催され、月寒体育館ではアイスホッケーが、西岡では距離競技とバイアスロンが行われる。政令指定都市への移行に伴い、月寒に豊平区役所開設
1974	昭和 49	豊平区役所が平岸の現在地に移転。環状通にリンゴ並木植樹
1976	昭和 51	第 1 回リンゴまつり開催
1977	昭和 52	区制 5 周年を記念して区のシンボルマークを制定
1978	昭和 53	豊平区民センター開設
1983	昭和 58	第 1 回りごみマラソン大会開催
1984	昭和 59	豊平区体育館開設
1987	昭和 62	西岡福住地区センター開設
1990	平成 2	羊ヶ丘通全面開通
1991	平成 3	札幌ユニバーシアード冬季大会開催。ミュンヘン大橋開通
1992	平成 4	豊平区の花「ペチュニア」を制定
1994	平成 6	地下鉄東豊線、福住まで延長
1995	平成 7	現在の幌平橋が全面開通
1997	平成 9	清田区が豊平区から分区

年 (西暦)	年 (和暦)	出来事
2000	平成 12	豊平に道立総合体育センター、留学生交流センターが完成 東月寒地区センター開設
2001	平成 13	羊ヶ丘に札幌ドームが完成 コンサドーレ札幌、札幌ドームでJリーグ初公式戦開催
2002	平成 14	札幌ドームでサッカーのワールドカップ大会開催 道立総合体育センターで DPI 世界大会札幌大会開催
2003	平成 15	「北海道日本ハムファイターズ」誕生 本拠地球場が札幌ドームに
2004	平成 16	豊平区キャラクター「こりん」と「めーたん」誕生 「連絡所」が「まちづくりセンター」に
2006	平成 18	豊平区保育・子育て支援センター（ちあふる・とよひら）開設
2007	平成 19	FIS ノルディックスキー世界選手権札幌大会が開催され、札幌ドームでは開会式とスプリント競技が行われる
2010	平成 22	南部市税事務所開設
2011	平成 23	平岸まちづくりセンター・平岸会館リニューアル
2012	平成 24	通年型の札幌市カーリング場開設
2015	平成 27	西岡まちづくりセンター・にしおか会館リニューアル 南平岸会館リニューアル
2017	平成 29	「2017 冬季アジア札幌大会」が開催され、区内ではアイスホッケー、 バイアスロン、カーリングの3競技が行われる 東月寒まちづくりセンターリニューアル
2018	平成 30	区役所3階にこそだてインフォメーション「りんごの森」開設 平岸庭球場開設 北海道胆振東部地震発生。豊平区は震度5弱。月寒東などで液状化現象が発生
2019	平成 31 令和元	月寒公園リニューアル 札幌ドームでラグビーのワールドカップ大会開催
2020	令和 2	区民センターリニューアル
2020	令和 2	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的大流行
2022	令和 4	区制 50 周年を迎える

図版・写真一覧

概略

- 図-1 『さっぽろ文化財散歩【縄文文化編】』の年表をもとに作成
写真-1 北海道大学附属図書館所蔵 武林盛一「札幌豊平橋架設足場」
写真-2 札幌市公文書館（複製）所蔵
写真-3 豊平区所蔵
写真-4 豊平区所蔵

行政

- 図-1 豊平区
図-2 札幌市編『新札幌市史 通史 2』をもとに作成
図-3 豊平区
図-4 豊平区
写真-1 札幌市公文書館所蔵
写真-2 豊平区所蔵
写真-3 『豊平写真帖』
写真-4 豊平区所蔵
写真-5 札幌市公文書館所蔵
写真-6 札幌市公文書館所蔵
写真-7 豊平区所蔵
写真-8 豊平区所蔵
図-5 豊平区
写真-9 豊平区所蔵
写真-10 豊平区所蔵
写真-11 豊平区所蔵
図-6 豊平区
写真-12 豊平区所蔵

産業

- 写真-1 『豊平写真帖』
写真-2 豊平区所蔵
写真-3 つきさつ郷土資料館所蔵
写真-4 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版
写真-5 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版
写真-6 「札幌市東部農協組合だより」
写真-7 札幌市公文書館所蔵
写真-8 豊平区所蔵
写真-9 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版
写真-10 北海道大学附属図書館所蔵 『東宮殿下行啓記念』下

写真 -11 国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 北海道支所所蔵

写真 -12 札幌市公文書館所蔵

写真 -13 豊平区所蔵

写真 -14 豊平区所蔵

図 -1 『豊平町史』

写真 -15 札幌市公文書館所蔵

写真 -16 札幌市公文書館所蔵

写真 -17 「札幌市東部農協だより」

写真 -18 北海道大学附属図書館所蔵 『開道五十年記念札幌区写真帖』

道路・橋

写真 -1 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版

写真 -2 豊平区所蔵

写真 -3 つきさつぷ郷土資料館所蔵

写真 -4 北海道大学附属図書館所蔵 田本研造「札幌豊平橋之旧景」

写真 -5 北海道大学附属図書館所蔵 「豊平橋橋梁材及現場作業の況」

写真 -6 札幌市公文書館所蔵 絵葉書

写真 -7 札幌市公文書館所蔵

交通機関

写真 -1 つきさつぷ郷土資料館所蔵

写真 -2 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版

図 -1 豊平区

写真 -3 札幌市公文書館所蔵

写真 -4 札幌市公文書館所蔵

写真 -5 札幌市公文書館所蔵

写真 -6 札幌市公文書館所蔵

写真 -7 札幌市交通局

写真 -8 札幌市交通局

教育

写真 -1 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版

写真 -2 札幌市公文書館所蔵 『札幌開始五十年記念写真帖』

写真 -3 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版

写真 -4 北海道大学附属図書館所蔵 『東宮殿下行啓記念』上

写真 -5 豊平区所蔵

写真 -6 豊平区所蔵

写真 -7 豊平区所蔵

旧陸軍

写真 -1 札幌市公文書館（複製）所蔵

写真 -2 札幌市平和バーチャル資料館所蔵

写真 -3 豊平区所蔵

生活・出来事

写真 -1 つきさつぷ郷土資料館所蔵

写真 -2 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版

写真 -3 豊平区所蔵

写真 -4 札幌市公文書館所蔵

写真 -5 札幌市公文書館所蔵

写真 -6 札幌市公文書館所蔵

写真 -7 つきさつぷ郷土資料館所蔵

写真 -8 札幌市公文書館所蔵

写真 -9 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版

写真 -10 札幌市公文書館所蔵

各地区の歴史と今

1 豊平地区

写真 -1 札幌市公文書館所蔵

写真 -2 豊平区所蔵

写真 -3 豊平区所蔵

写真 -4 豊平区所蔵

2 美園地区

写真 -1 札幌市公文書館所蔵

写真 -2 札幌市公文書館所蔵

写真 -3 札幌市公文書館所蔵

写真 -4 札幌市公文書館所蔵

写真 -5 札幌市公文書館所蔵

写真 -6 豊平区所蔵

3 月寒地区

写真 -1 札幌市公文書館

写真 -2 『とよひら 豊平町勢要覧』昭和 35 年版

写真 -3 豊平区所蔵

写真 -4 豊平区所蔵

写真 -5 豊平区所蔵

4 平岸地区

写真-1 北海道大学附属図書館所蔵『東宮殿下行啓記念』下

写真-2 豊平区所蔵

5 中の島地区

写真-1 『なかのしまの今昔』

写真-2 北海道自動車学校

写真-3 豊平区所蔵

写真-4 豊平区所蔵

写真-5 豊平区所蔵

6 西岡地区

写真-1 札幌市公文書館所蔵

写真-2 豊平区所蔵

写真-3 豊平区所蔵

写真-4 豊平区所蔵

写真-5 豊平区所蔵

7 福住地区

写真-1 福住開拓記念館所蔵

写真-2 豊平区所蔵

写真-3 豊平区所蔵

写真-4 豊平区所蔵

写真-5 豊平区所蔵

8 東月寒地区

写真-1 『八紘学園七十年史』学校法人 八紘学園

写真-2 一般財団法人 札幌観光協会

写真-3 有田京史

9 南平岸地区

写真-1 豊平区所蔵

写真-2 豊平区所蔵

写真-3 豊平区所蔵

写真-4 豊平区所蔵

主な参考文献と発行者

『新札幌市史』(各巻) / 札幌市

『豊平町史』 / 豊平町

『豊平町史補遺』 / 札幌市

『豊平町勢要覧』 / 豊平町

「広報さっぽろ豊平区民のページ」 / 札幌市豊平区

『さっぽろ文庫』(各巻) / 札幌市教育委員会

『第11回オリンピック冬季大会札幌市報告書』 / 札幌市

『札幌市墓地・火葬場の沿革』 / 札幌市

『豊平消防百周年記念誌』 / 豊平消防百周年記念誌編集委員会

『さっぽろの足～写真でつづる50年』 / 札幌市交通局

『北緯43度札幌というまち』 / 札幌地理サークル

『豊平東部農業共同組合30年史』 / 豊平東部農業協同組合

『北海百年史』 / 学校法人北海学園

『百年のあゆみ』 / 札幌市立豊平小学校百周年記念事業協賛会

『とよひら物語～古老をたずねて』 / 札幌市豊平区

『とよひら物語～碑をたずねて』 / 札幌市豊平区

『郷土史豊平地区の140年』 / 豊平地区郷土史発行委員会

『郷土誌とよひら』 / 豊平小学校開校百二十周年記念事業協賛会

『豊平の歴史』 / 中川昭一

『水車ものがたり(旭小学校30周年記念)』 / 札幌市立旭小学校

『郷土誌つきさむ』 / 札幌市立月寒小学校開校百周年記念事業協賛会

『星霜九十年』 / 月寒小学校開校九十周年記念祝賀協賛会

『星霜百年』 / 月寒小学校開校百周年記念事業協賛会

『学習資料集しらかば台』 / 札幌市立しらかば台小学校

『月寒地区町内会連合会50年のあゆみ』 / 月寒地区町内会連合会

『郷土誌羊丘』 / 札幌市立羊丘小学校開校二十周年記念事業協賛会

『つきさむひがし』 / 月寒東小学校開校十周年記念事業協賛会

『平岸百拾年』 / 平岸百拾年記念協賛会

『郷土誌ひらぎし』 / 平岸小学校開校80周年記念祝賀協賛会

『郷土誌ひらぎし第2号』 / 平岸小学校開校90周年記念協賛会

『風雪百年』 / 平岸小学校開校百周年記念事業協賛会

『開校20周年郷土誌「ひがしやま」』 / 札幌市立東山小学校

『郷土誌なかのしま』 / 札幌市立中の島小学校開校10周年記念事業協賛会

『なかのしまの今昔』 / 中の島地区町内会連合会

『西岡部落史』 / 沼田由吉

『西岡百年史』 / 西岡開基百年記念祝賀協賛会

『開基100年記念誌「にしおか」』 / 西岡開基百年記念祝賀協賛会

『福住～沿革と概況(福住開基百年記念誌)』 / 福住開基百年記念協賛会

豊平区の歴史

～ THE HISTORY of TOYOHIRA WARD ～

平成 14 年 4 月 1 日発行

平成 15 年 3 月 10 日一部改訂

平成 19 年 3 月 30 日一部改訂

令和 6 年 3 月 30 日増補改訂

編集 豊平区市民部総務企画課広聴係

〒 062-8612 札幌市豊平区平岸 6 条 10 丁目

電話 (011) 822-2407 FAX (011) 813-3603

<https://www.city.sapporo.jp/toyohira/>

発行 札幌市豊平区



SAPPORO
さっぽろ市
01-Q1-23-2612
R5-1-187